

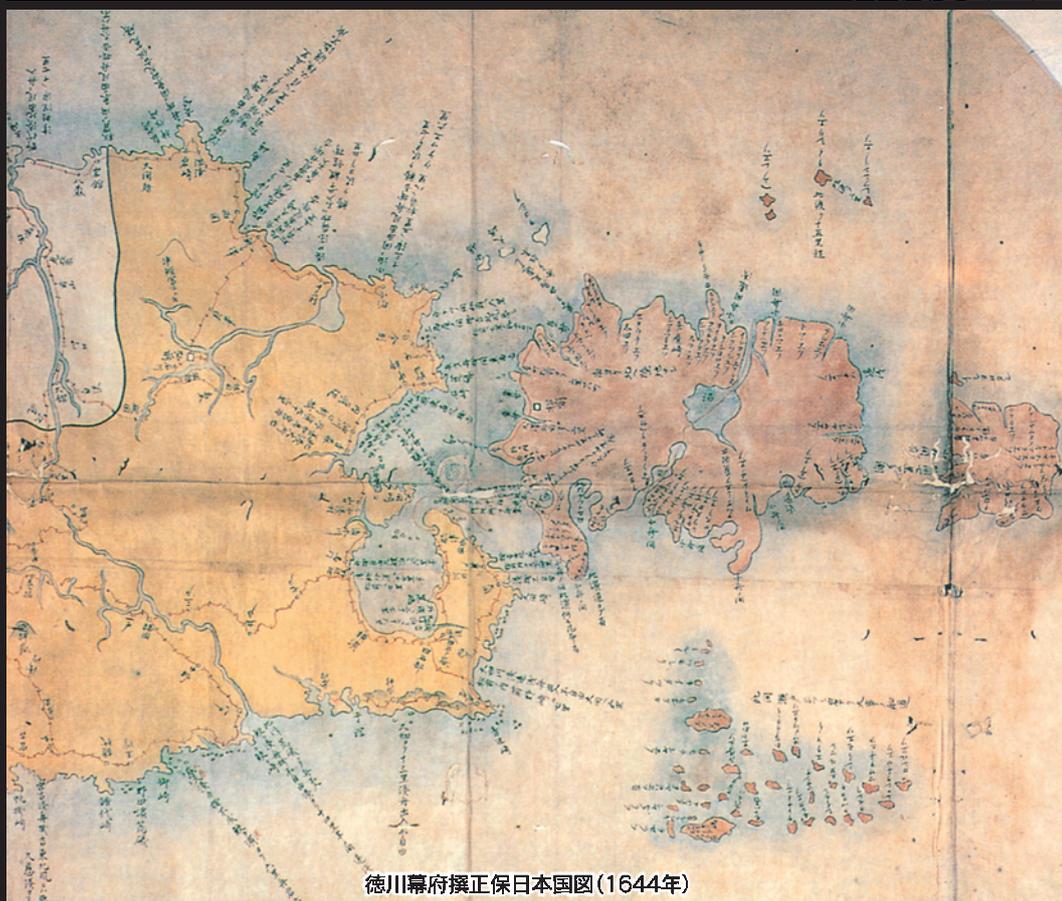
元島民の訴え

平成 22 年 度

# 北方領土の早期返還を求めて

第21回「元島民の北方領土を語る会」集録

日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



徳川幕府撰正保日本国図(1644年)

主 催 / 外 務 省

実施団体 / 社団法人 北方領土復帰期成同盟

# も く じ

1	平成22年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成22年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	4
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	【長崎県会場】	5
	○北方領土の早期返還を求めて	金 田 慎 吾 (国後島元島民二世)
	○北方領土の早期返還を求めて	児 玉 泰 子 (志 発 島)
	○北方領土返還要求運動について	永 田 しのぶ (北方領土復帰期成同盟)
	【茨城県会場】	16
	○島への想いを継ぐ	神 林 美 砂 (志発島元島民二世)
	○四島(しま)とわたしの思い出	三 船 志代子 (択 捉 島)
	○北方領土返還要求運動について	山 崎 隆 (北方領土復帰期成同盟)
	【福島県会場】	26
	○北方領土の早期返還を求めて	野 潟 龍 彦 (国後島元島民二世)
	○北方領土返還要求運動について	永 田 しのぶ (北方領土復帰期成同盟)
	【徳島県会場】	30
	○「四島を返せ」いつまで続く元島民の叫び	眞 下 清 (国 後 島)
	○徳島の語り部で思ったこと	木 村 吉 伸 (志発島元島民二世)
	○北方領土返還要求運動について	山 崎 隆 (北方領土復帰期成同盟)
	【北海道会場】	37
	○ふるさと	高 岡 唯 一 (多 楽 島)
	○室蘭で感じたこと思ったこと	木 村 吉 伸 (志発島元島民二世)
	○北方領土返還要求運動について	末 澤 秀 樹 (北方領土復帰期成同盟)

# 1 平成22年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

## 1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

1956年、日ソ共同宣言が署名され、両国間に国交が再開されてから既に60年以上が経過した。この間、我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、未だ不法に占拠された状態が続いている。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

## 2 主 催

外 務 省

## 3 実施団体

社団法人北方領土復帰期成同盟

## 4 後 援

社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

## 5 開催時期・場所

開催時期	開催地	開催団体	開催場所
6月5日(土)	長崎県	長崎県地域婦人団体連絡協議会	長崎県婦人会館
6月8日(火)	茨城県	茨城県地域女性団体連絡会	水戸市三の丸庁舎
7月5日(月)	福島県	福島県婦人団体連合会	郡山市男女共同参画センター
7月20日(火)	徳島県	徳島県婦人団体連合会	徳島県婦人会館
10月29日(金)	北海道	北海道女性団体連絡協議会	北海道胆振地方男女平等参画会館

## 6 開催内容

### (1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟 (10分)

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、  
北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世 (20分)

北方領土元島民 (40分)

7 開催方法

5の開催団体が各種の大会、研修会等を実施する際にこれらの行事のプログラムに繰り入れて開催する。

8 開催経費

元島民及び元島民二世の派遣経費並びに会場設営費及び消耗品費等の一部を開催経費として外務省予算から負担する。(それ以外は、開催団体負担)

## 2 平成22年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
6月5日(土) 長崎県長崎市 長崎県地域婦人団体連絡協議会	60	児玉 泰子 (66) 志発島	職 業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和19年10月 志発島生まれ 昭和22年 強制送還 平成8年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 平成21年 (社)千島齒舞諸島居住者連盟理事 (現在に至る)
		金田 慎吾 (49) 国後島(二世)	職 業 税理士 昭和36年 札幌市生まれ 昭和59年 金田税理士事務所入社 平成10年 千島齒舞諸島居住者連盟道央支部虹の会初代会長 平成11年 金田慎吾税理士事務所開設
6月8日(火) 茨城県水戸市 茨城県地域女性団体連絡会	150	三船志代子 (72) 択捉島	職 業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和13年9月 択捉島薬取生まれ 昭和22年 強制送還 昭和32年 根室生産農協連勤務 平成13年 「四島(しま)とわたし」絵本コンクール最優秀賞
		神林 美砂 (49) 志発島(二世)	職 業 会社役員 昭和36年 根室市生まれ 昭和61年 東京たばこサービス(株)入社 平成11年 (有)ジニアドバタイジング
7月5日(月) 福島県群山市 福島県婦人団体連合会	100	中田 勇 (82) 色丹島	昭和3年6月 色丹島生まれ 昭和21年 北海道庁立根室中学校卒業 昭和23年 ~平成元年 根室管内一市四町公立小・中学校にて教員
		野潟 龍彦 (58) 国後島(二世)	職 業 会社役員 昭和27年 根室市生まれ 平成15年 (社)千島齒舞諸島居住者連盟理事
7月20日(火) 徳島県徳島市 徳島県婦人団体連合会	150	眞下 清 (75) 国後島	昭和10年9月 国後島生まれ 昭和26年 郵政省戸田郵便局 昭和50年 九戸村議会議員(4期) 昭和63年 九戸村収入役(1期) 平成19年 岩手県民会議理事
		木村 吉伸 (40) 志発島(二世)	職 業 落語家 昭和45年10月 根室市生まれ 平成2年 三遊亭金馬に入門 平成5年 ニッ目に昇進 平成14年 真打に昇進
10月29日(金) 北海道室蘭市 北海道女性団体連絡協議会	90	高岡 唯一 (75) 多楽島	職 業 自営業(水産加工業) 昭和10年5月 齒舞群島多楽島生まれ 昭和20年 多楽島から脱出 昭和30年 株式会社辻中商店勤務(現専務取締役) 昭和57年 千島齒舞諸島居住者連盟羅臼支部長(現顧問) 平成12年 千島齒舞諸島居住者連盟援護委員長
		木村 吉伸 (40) 志発島(二世)	職 業 落語家 昭和45年10月 根室市生まれ 平成2年 三遊亭金馬に入門 平成5年 ニッ目に昇進 平成14年 真打に昇進

### 3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

#### 【長崎県会場】

- 開催日時 平成22年6月5日(土) 12時00分～13時30分
- 開催場所 長崎県婦人会館
- 開催団体 長崎県地域婦人団体連絡協議会
- 参加者 60名

#### 元島民二世の訴え



### 北方領土の早期返還を求めて

金田 慎吾 さん

みなさん初めまして。私は金田慎吾と申します。私は昨日長崎に到着して、平和記念公園や原爆資料館等を見学させていただきました。私はこの「北方領土を語る会」で各地をまわってお話をさせていただいておりますが、前回訪問した町が広島市でした。

広島の後に長崎ということで、真っ先に頭に浮かぶのが原爆です。広島、長崎に来ると、改めて原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを痛感させられます。被爆された方々のことを思うと、無念さで本当にやりきれない気持ちになります。そして戦争が終わって65年も経つのに、未だに原爆の後遺症で苦しんでいる方々がおられることを思うと、このような悲劇を二度と繰り返すべきではない、核兵器の廃絶ということを必ず実現しなければならないと感じました。

アメリカでは、原爆投下は戦争を終わらせるために必要だったという教育をしてきたようですが、原爆についてのドキュメンタリー映画「ヒロシマナガサキ」がアメリカでテレビ放映されたときには、原爆による被害のあ

まりの凄惨さに、それを見たアメリカ人が、原爆投下は誤った選択であったと驚愕していたのが非常に印象的でした。我々日本人には、唯一の被爆国として核兵器の恐ろしさというものを全世界に伝えていかなければならない使命があると思います。

今、日本では戦後生まれの人が75%を超えてきたそうです。この数字は年々大きくなり、やがて100%になります。戦争や原爆のことを知らない世代が、どんどん増えていく状況の中、戦争という愚かな行為を再び起こさないようにするためには、その悲惨さを次の世代へ語り継いでいかなければならないと思います。

ところで、本日私がここに来たのも、戦争による被害について語り継ぐためであります。それは北方領土問題です。この問題については、元島民の方より詳しいお話があると思いますので、その内容については省略させていただきますが、原爆と同じように未だにこの問題で苦しんでいる方々がいるということを知っていただきたいのです。

ちょっと想像してみてください。ある日突然、ここに住めなくなることを。長崎県はほかの国が統治するので、他の地に移住しなさい、なんて言われたらどうしますか。家も仕事も学校もお墓も、何もかも捨てて、今すぐここから出て行きなさい！…ここは、これから違う国が支配します。なんて言われても困りますよね。どこへ行ったらいいのか、仕事は？学校は？住むところは？明日からどうすればいいのか？想像してみてください。途方に暮れますよね。

でも、こんなことが実際にあったのです。これが北方領土問題なのです。今の自分に当てはめて、想像してみてください。今、住んでいるこの地を、着の身着のまま出て行くことを…。北方領土に住んでいた人たちの苦勞、そしてどれだけ大変な思いをしたか。終戦直後ですから、親戚や知人を頼っても、みんな大変なときで迷惑をかけることもできない。そのつらさたるや、私たちの想像をはるかに超えるものがあつたんだろうと思います。

沖縄も終戦後、アメリカの占領下にありましたが、住民はそこに住むことができました。今でも米軍基地の問題などがあり、沖縄の人たちも大変だとは思いますが、北方領土の人たちはそこに住むことさえ許されませんでした。こんな理不尽なことはないです。いきなり住んでいる所を追われて、そこに行くことすらできなくなって、生活の基盤を根こそぎ奪われたのですから。誰でも言います。「ふるさとを返してくれ」と。「家を、土地を、お墓を、思い出を、私たちのふるさとを返してほしい」と。ただそれだけです。

しかし、いまだ元島民の願いはかなえられません。島に帰りたくて帰りたくて、願ひかなわず亡くなった人もたくさんいます。それもそのはず、終戦からもう65年以上も経ってしまいました。当時20歳だった人も、もう85歳です。私たちは急がなければなりません。元島民の人たちがまだ生きている間に、北方領土を返してもらわなければ、意味がないの

です。

ここ最近、基地移転問題で沖縄県の人たちが振り回されています。長い間、米軍基地があつて騒音や不安にさいなまれてきて、やっと解放されるかと思いきや、結局沖縄になりそうな気配です。本当に国の都合で災難をこうむるのは我々国民です。

そして、この北方領土問題もまた、国の都合で元島民の方々につらく悲しい思いをさせたものであると言えます。人生を狂わせられた人の数で言えば、北朝鮮の拉致問題でさえも北方領土の比ではありません。私は、この北方領土問題が国を挙げて真剣に取り組んでいかなければならない重大な問題だと考えております。

ただ、人生を狂わせられた私の母は、北方領土から引き揚げてきたおかげで私の父と出会い、私が生まれました。人生が狂ってしまったおかげで生まれた私はちょっと複雑な心境で、逆に旧ソ連に感謝しなければならないのかもしれませんが、それはまた別の話で、やはり正すべきものは正さないといけないと思います。

4年前、私はロシアの首都モスクワに行ってきました。モスクワでは、いくつかの公的機関を訪問しましたが、いずれの意見交換においてもロシア側の見解が、北方四島については「第二次世界大戦という戦争の結果としての国境線の形成である」という主張で、日本側の「固有の領土」という見解とは大きな隔たりがあります。日本側が「第二次世界大戦ではソ連と直接戦争をしたとは認識していない」と反論すると、「日本とソ連は互いに敵対するグループに所属していた」とロシア側は主張します。

さらに日本側が「ソ連が北方領土に侵攻してきたのは、8月15日のポツダム宣言受託後、つまり終戦後の8月28日から9月5日にかけてであり、これは日本としては侵略と認識している」と主張すると、「過去にこだわらず、互いの一致点を見つけることが重要だ」など

と、自国に都合の悪いところははぐらかすような発言もありました。

ロシア側は「一度得た領土を引き渡すということは、ロシア国民の理解を得ることは決してなく、それは屈辱的な外交である」と言っています。私は北方領土問題の解決を図るなら、極めて政治的な部分からのアプローチ以外にはないという印象を強く受けました。

1956年、日本と旧ソビエト連邦との間で、平和条約締結後、歯舞、色丹の二島を日本に返還するという内容の日ソ共同宣言が交わされました。ロシアはソ連の継承国としてその意義を認め、平和条約締結後に二島の引き渡しは行うということを言っております。しかし、これは返還ではなく、あくまでロシア側の善意による引き渡しである、と主張しております。戦争の結果としての領土の帰属はあくまでロシア側にあるという考え方です。

したがって、残る国後、択捉両島は引き渡さないと考えています。しかし、領土の引き渡しを屈辱的外交にとらえる国が、日ソ共同宣言で二島の引き渡しを盛り込んでいるということは、そもそも北方四島の占領の過程に多少の引け目を感じているからに違いないと私は思っております。

日本としては日ソ共同宣言については、二島の引き渡し後に残る二島の引き渡しについて継続協議するものにとらえており、ロシア側とは基本的な考え方で対立しています。

4年前の10月19日にモスクワ市庁舎で開催された「日ロフォーラム」では、当時は衆議院議員だった鳩山由紀夫さんが「もう一度1956年の日ソ共同宣言の原点に立ち戻って考えることを提案する」と述べ、河野太郎衆議院議員が「日ソ共同宣言から日ロ両国がともに歩み寄り、例えば国後島と択捉島を合わせた面積を1/2にし、択捉島に国境線を引くという方法もある」と、具体的な提案をされました。ただ、ロシア側の対応については、この問題をできるだけ棚上げしたいという意図を全体的に感じました。とは言っても、日

ソ共同宣言から節目の50年を迎えた年に行われたこの「日ロフォーラム」は、北方領土問題の解決の糸口となるような期待を持たせる有意義な大会でした。

私の個人的な見解としては、歴史的にもソ連の四島占領は侵略行為であり、国際的に見ても不当なものであると思います。しかし、両国が「四島だ」「二島だ」と主張しあっていたのでは、いつまでたっても解決の道は見当たらず、元島民の方が生きているうちに問題が解決するとは思えません。北方領土に住んでいた方たちに故郷を返すという最大の目標を実現させるためには、早急に領土返還に向けた現実的な対応を行うべきだと思います。

そして、現実的に解決することを図るなら、両国が互いに譲歩し、ともに納得できる具体的な解決方法を提案し続けることが大事なのではないかとモスクワ訪問で強く感じました。

ヒロシマ、ナガサキに落とされた原爆に今なお苦しめられている人たち、ふるさとを奪われて今なお戻れない人たち。戦争という国家間による暴力行為はいまだに国民に痛みを残し続けています。このようなことが二度と起こらないように、私たちは後世にこれを伝えていかなければなりません。これからみなさんが戦争や原爆について、お子さんやお孫さんに語り継ぐとき、この北方領土問題についてもひと言申し添えて下さい。それだけで、今日私がみなさんの前でお話させていただいた意味があったかなと思います。





## 北方領土の早期返還を求めて

児玉 泰子 さん

私は、1944年の秋に齒舞群島の志発島で生まれました。そして、1947年強制送還で島を追われました。故郷志発島は、納沙布岬から約23km先にあり、島は起伏がほとんど無く平坦な草原です。戦前、島民は東側と西側に別れ、主に昆布漁などを主体に生活しておりました。

元島民として話す前に、長崎と北方領土との関わりを少々話します。北方領土問題を話す時に、四島返還の根拠として日露間の国境線は、1855年に締結された「日魯通好条約」であります。この条約では、択捉島以南は日本領にウルップ以北はロシア領と明記された。だから四島は日本の固有の領土といわれております。

この条約は伊豆の下田で調印されましたが、1853年8月、ロシアのプチャーチン特使は交渉のためにこの長崎に赴き半年滞在し、幕府の関係者と交渉を行っております。当時は鎖国時代です。開港を求めるロシアとの交渉は難攻、江戸では幕府の代表者をやっとな川路左衛門に充てることにしました。幕府の代表に決まった川路は、陸路長崎に赴きましたがプチャーチンは痺れをきたし、既に下田に向かっていたのです。川路も、長崎から直ちに下田に向かい交渉が行われ、その後、日魯通好条約が結ばれたのです。長崎は日口の歴史にもかかわっております。

今、長崎は坂本龍馬が随所で紹介されておりますが、ロシアの特使プチャーチンのことも少し紹介して欲しいと思います。

もう一つに、余談ですが北方領土返還要求運動の原点の地、北海道の根室との関わり名

物のお菓子「オランダせんべい」があります。このせんべいは、やわらかいです。平戸で見た「オランダ焼き」と同じ大きさで同じ模様です。昔、根室に型が渡ったのではないのでしょうか。北海道の東の端に、長崎の平戸の橋模様をモチーフにしたせんべいがあるのです。

北方領土問題は、遠いところの問題ではなく、長崎と深い関わりを持っていると思ってください。それでは、北方領土について話します。

私の家は、志発島の東側で昆布漁を営んでおりました。春から秋までの漁期には、夜明け前に起床、早朝から日が沈むまで休む暇を惜しみ家族全員で働いておりました。冬季は、魚網の整備や翌年の漁具の準備をします。生活物資は、根室から船で運ばれ豊かな海の恵みを受け、島民全体が一つの家族のように助け合い、平和でのどかな日々を送っておりました。

しかし、1945年9月、島はソ連軍に占領され、ソ連軍の管理下におかれた島民の生活は一変し、根室との連絡も遮断され、ソ連軍の監視下での生活が始まりました。

私の家族は、1947年11月、強制送還の船で故郷の島を離れる事になりました。私は、当時3歳でしたので島の記憶は全くありませんが、家族や島民の方々から島の話しを沢山聞いて育ちました。

私は「自分は生きていくうちに必ず故郷に帰る。そして家族全員で再び暮らす。」その一念で、北方領土の返還要求運動に43年間かかわって参りました。

今日は「必ず島に帰るんだ。島は良かった。」

と望郷の念を抱き亡くなった家族や、同胞の想い、そして自分が体験したこと等を交え、  
1・北方領土の概要と自然。2・開拓と戦前の様子。3・占領から強制送還。4・元島民の故郷への想いなどをお話いたします。

戦前、北方四島には17,291人が定住していましたが、春から秋の漁期には、大勢の出稼ぎ労働者が入り、人口は膨れ上がり漁業基地として大きな生産を挙げておりました。

北方領土の面積・歴史・条約などは、先ほど事務局の方が説明されましたが、面積に関して分かりやすく話します。国後島は、沖縄本島より少し大きく、択捉島はその2倍です。北方四島を、歯舞・色丹・国後・択捉と呼びますが、歯舞と言う名の島はありません。正式には歯舞群島です。命名の由来は、根室から納沙布岬に行く途中16キロの所に歯舞村の本村がありました。群島はこの村の行政区域だったのです。現在、歯舞は本村と群島が寸断されているのです。

周辺の海は水産物の宝庫。戦前の主な生産品は、歯舞群島は昆布、色丹は鯨・鱈など、国後は蟹缶、択捉は鮭鱒の塩蔵でした。その他、いずれの島でも、干鱈・ホタテの貝柱・海苔・小型魚種等も生産しておりました。それでは個々の島々に関してもう少しお話いたします。

歯舞群島は、どの島も起伏がなく平坦で一面草原に覆われています。周辺の海は岩礁が多く、良質の昆布の宝庫です。従って、昆布を餌にする、ウニ・蟹・貝類などの甲殻類やこれら甲殻類を餌とするアザラシやラッコなどの海獣類も多く生息しています。

昆布漁が主体、生産された昆布は国内は元より上海などに輸出されておりました。他に、帆立貝の缶詰なども生産しておりました。また、島内の草原を利用し馬の飼育も行われていました。特に軍馬の生産地でした。水は豊かで飲料水には恵まれておりました。婦人会の皆さんには、歯舞産の昆布は馴染みの品と思います。

色丹島の産業は、補鯨が主体で東洋一の捕鯨基地だったと聞いております。島はとっても綺麗です。緩やかな稜線と緑の濃淡が美しく、自然の箱庭、独特の風景です。特に太平洋側の海岸線の松と岩礁のコントラストは見事です。この島にのみ自生する高山植物が多く生息、高山植物の宝庫です。

国後島の周辺海域は、タラバガニや帆立貝の宝庫で主な産業は蟹缶詰の生産でした。世界で初めてタラバガニの缶詰生産を行ったのが国後島だとも言われております。生産された蟹缶詰は横浜から海外に輸出されておりました。

東方には、北方四島で一番高い「爺爺岳」がそびえます。オホーツク海岸には海底火山で出来た見事な柱状節理「材木岩」があります。その他、良質な温泉も湧き自然溢れる島です。

択捉島は雄大です。島内は大小200本の川が流れています。この川に秋になると大量の鮭・鱒が遡上します。

島内の自然は正に絶景です。山また山、大小の無数の山が幾重にも連なり、雄大な景観は圧巻、他に類を見ないほどで自然の宝島、山と水の島です。山から流れる川と湧き水は大湿原を作ります。どこまでも続く草原は広大な原生花園、次々に可憐な花を咲かせます。大小200本の川は陸の栄養を蓄えミネラルをたっぷり含んで海に流れ、周辺の海域を豊かにします。海草が育ち甲殻類の揺り籠、ラッコなどの成育に最適です。

延々と続く白い砂浜やリアス式海岸。島の東方にある「ラッキベツ滝」は落差141m、水量も多く圧巻です。もちろん、温泉が湧き出ております。

北方四島の海域は、オキアミからシャチまでが生息する正に豊饒の海です。また絶滅危惧種の海鳥、エトピリカ・ケイマフリ・ウミガラスなどの海鳥が生息し、陸にもホテイアツモリソウ、その他の絶滅危惧種の高山植物が多く自生する自然の楽園です。

ロシア政府は、現在、島々の開発に着手しました。この豊かな自然が壊されつつあります。そして、魚類の乱獲が続き、甲殻類が極端に減少しています。甲殻類が無くなるとラッコなどが生息できなくなります。自然環境が崩れつつあります。

北方領土の本格開拓は江戸時代です。私の先祖は岩手県から船を調達し、島に渡っております。島の開墾は大変だったそうです。

昆布の干場を作ることから始まりました。草原を掘り起こし、砂と石を入れ、土をかけてしっかり固めます。その時、中心を少し高めに少し傾斜が付くようにします。これが完成しましたら、碁盤目の溝を掘ります。更に、石を敷きその上に砂を敷きます。昆布生産の対敵は雨水です。干場作りに手間を掛けるのは雨水のはけを良くするためです。正に父祖が血と汗で築いた土地です。海の恵と大地の実りに恵まれ、島民全員が大きな家族のように助け合い生活しておりました。

私は、7年前やっと生まれた家の跡に立つことが出来ました。見渡す限り、背丈まで伸びた草で覆われていました。「やっと来た」草をかき分け夢中で進みました。目印は何もありませんでした。限られた時間の中で「何か探せなければ」、汗だくで動き焦るばかりでした。やっと、草の中に祖父が使っていた手水鉢を見つけました。触るのも恐れボーッと立ちつくしました。気をとりなおして、一帯をゆっくりと歩くと足の感覚が変わりました。硬いのです。ここだけ背低い草が茂っています。先祖が丹精込めて作った昆布の干場でした。目頭が熱くなり故郷が涙で霞みました。

島は戦争の直接被害を受けずに生活していました。戦争との関わりは、軍人さんの駐屯と軍馬の生産。更に、昆布を焼いて煮詰め「塩化カリ」を作り、軍に納めていました。これは火薬の原料になったそうです。

村の青年の多くが出兵し、私の叔父も出兵しておりました。父は、昆布漁の他に馬の飼

育に長けていたので、軍から軍馬の種馬を預かり、軍馬の生産にも携わっていました。1945年7月、根室がアメリカの艦砲射撃で街の7割が焼け野原になりました。根室を焼けつくす火は空を真っ赤に染め、志発島からも見えました。根室が焼けている。親戚が多いので島民の不安が募りました。戦争はどうなるのだろうか。

1945年8月15日、村人はラジオから流れる天皇陛下の声を聞いたそうです。私の家族はこれからどうなるのかと不安を抱きながらも、それまで通りの生活を続けたそうです。

終戦の知らせを受け、アメリカ兵が来るのではと思っていました。しかし、9月2日、私の島にソ連兵が上陸して来ました。駐屯していた日本の兵隊さんは、シベリアに送られ日本軍の施設はソ連軍は利用しました。

島の占領は、初めに8月28日早朝、択捉島の留別村にソ連軍が海から上陸してきました。この日は、よく言う一寸先も見えないような海霧に包まれ、島民はソ連兵の上陸に気づきませんでした。日が登り、霧が薄くなると、島民の目の前に銃をかまえたソ連兵が立っていたのです。役場、学校、警察、郵便局など主要な施設はソ連兵におさえられました。

そして、国後、色丹へ歯舞群島の島々が次々と占領され、9月5日までに全ての島が占領されました。島民は本土との連絡も途絶え、ソ連の監視下で不安な生活が始まりました。

島にソ連軍が上陸した。知らせを受けた我が家は、母と乳飲み子の私を屋根裏に隠したそうです。銃を抱え土足で家に上がって来ました。どうなるのだろうと恐怖が募りました。

日々が経過する中で何日か置きに見回りに来るソ連兵のパターンが分かりました。そして、ソ連軍が島を巡回するには馬が必要です。良い馬が居る我が家に立ち寄り、馬を調達します。母は、毎日屋根裏に隠れているわけには行かないので、居間に降りていました。その時ソ連の将校が家に上がってきました。将

校が、身振り手振りで私を抱かしてほしいと要求していることが分かったそうです。恐る恐る私を渡したそうです。将校は上手に私をあやし、自分にも同じ位の子供が居ると身振りで伝えたそうです。母は、親として子供を思う心はロシア人も同じだと思えば、恐怖心は消えたそうです。島を離れるまでの二年間、将校は私のことを自分の子供のように可愛がってくれたそうです。

しかし、人々の生活は常にソ連軍の監視下の元、根室との連絡は途絶え自由を奪われ、漁師の父も土木作業に借り出されるなど一変しました。怖くて脱島する人も出て来ました。

こうした中、一般のロシア人が島に入ってきました。ロシア人は着の身着のまま、麻袋にフライパン一つ程度の荷物でした。住む家もなく、ロシア人は脱島した日本人の家に住みました。学校は二つに分けて使用しました。こうして文化や風習、更にモラルも異なりトラブルも発生しましたが、ロシア人と日本人が助け合いながらの共同生活が始まりました。日本人だから日本の領土だから島に留まったのです。

言葉も風習も異なり、銃を抱え土足で家に入るソ連兵に対する恐怖は募り、特に年頃の娘さんがいる家族は不安だらけでした。年頃の女性は髪を切り、男性用の服を身につけ、胸にさらしを巻き、あぐらをかいて座るようにしました。家族は娘の身を案じ、脱島を決意しました。

国後島のある家族です。18歳の娘さんがいました。ある日、親から島を出る事にした。何時でも出られるように、準備して置くようにと言われたそうです。その夜は、島を離れると思うと寂しくて涙が流れたそうです。脱出する日はソ連兵の監視が怠る、海が荒れている日か濃霧の日です。

ある嵐の夜、寝付いたらお父さんに島を出ると起こされたそうです。その時にお母さんから、万が一の時にこれを飲むのよと言われ、毒入りの団子が入った小さな袋を渡されまし

た。袋は着物の内襟に縫い付けました。恐ろしくて叫びたくなり足が震えました。

船は島を離れ、根室に向かいましたが嵐で航行不能になり、国後の浜辺で休む事にしました。暗闇の中、大波に襲われながらもどうか浜辺に上陸し、時化が収まるのを待ちました。夜が明け辺りが見えてきました。目に飛び込んできたのは、浜辺に打ち上げられている死体でした。先に脱出した知人です。嵐で遭難したのです。自分もこうなるのではと恐ろしくてたまらなかったそうです。

やっと嵐が収まり、再び船に乗りました。ずっと船倉に身を屈めていました。何時間か経った時、お父さんの「もう出て来て良いぞ」と声が聞こえてきました。甲板に出ると根室の街並みが見えました。お母さんと抱き合い、互いに毒入りの饅頭の袋を襟から取り合いました。彼女はそれから故郷の国後が見える根室で生活しています。故郷には帰りたいが、あの脱出した時の恐怖が蘇り、海峡を渡ることには出来ないと話しております。

1947年7月から送還が始まりました。僅かな荷物を持ち、島からソ連の貨物船に乗せられ樺太の真岡に収容されました。そして、日本の船で函館に送られた。送還は1947年5回。1948年2回です。計7回です。最後の送還は1948年10月でした。島民は島に留まりたかったです。島に留まるとソ連の国籍に入れられるのです。日本人として生きていくためには、止むを得ず島を離れるしかなかったのです。しかも一時的な引き揚げとっていました。

私の家族は1947年11月、送還されることになりました。島を離れる前に家財道具を整理しました。「必ず島に帰れる」から、家財道具の一部は軒下に穴を掘り埋めました。持ち出せる重さが決められました。ソ連の将校が来て、「今、日本は食糧が不足している。食料と衣類を持ったほうが良い」とアドバイスしてくれたそうです。手荷物を造りました。

私は3歳になっていました。妹は一歳と3ヶ月でヨチヨチ歩きです。11人の家族は、

指定された浜辺に向かいました。島民が集まっておりました。炎天下の中で、長時間立たされ一人一人身元確認がされ、やっと小船に乗り沖合いに停泊しているソ連の貨物船に向かいました。貨物船は高いので乗り移ることが出来ません。

荷物の上げ下ろしに使用する、大きな網袋に私たちは詰め込まれました。荷物同様に網袋に入れられた私たちは、ウインチで10mほど吊り上げられました。袋は大揺れ、下は海です。恐ろしくて震え、泣き出す者、念仏を唱える者、生きた心地がせず声も出せない状態でした。

貨物船は、その後他の島を回り、どの島でも同様に日本人を収容しました。初冬の北の海は荒れ狂い、船の波間に漂う船、酔い嘔吐などで悪臭が漂い、船倉も甲板も人で大混乱でした。トイレの数も不足、船倉に入れられた年配者や幼児は急な縄梯子を昇れません。やむを得ず空いた容器に用を足します。甲板にいる人は甲板の端で用を足しました。

時化の海水が甲板を襲い、この嘔吐物や汚物を含んだ海水船倉に落ちてきます。頭から汚物を含んだ海水をかぶるのです。体力のない老人や、幼児が亡くなると病気が発生するので海に捨てました。

辿り着いたのは樺太の真岡でした。樺太の大地はもう凍りはじめていました。丘の収容所に向かいました。小雨が弱った体力に容赦なく降り注ぎ、寒さが襲ってきました。急なドロドロの坂道に足を取られながら歩かされました。父は背負ったリックサックの上に私を乗せ姉の手を取り、母は妹を背負い兄の手を取り、祖父母や叔父・叔母は荷物を抱え、黙々と歩いたそうです。

収容所は女学校でした。建物の中に入れない人はテントでした。収容所の食事は乏しく、黒パンと塩スープのみ、体力の無い人は「飯が食べたい」と言いながら亡くなりました。亡くなった人は集められ、トラックに積まれ運ばれていきました。

その後、日本の船が向かいに来ました。そして辿り着いたのが、北海道の函館でした。やっと着いた皆は、涙を流し抱き合いました。

私たち家族は根室に向かいました。根室では11人の家族と一緒に住む家が無いので、親戚の家や母の実家に分かれて住むことになりました。以来、今日まで私たちは一度も家族全員で生活することができませんでした。私にとって島は、家族が全員で暮らした唯一の場です。

先に話しましたが、私の曾祖父は江戸末期島に渡り、4代に亘り島で生活していました。曾祖父は祖母の父親でした。島生まれの祖母は、栃木から島に渡って来た祖父と結婚しました。

ある年、島は春になっても海が荒れ、定期船が立ち寄れなく島民が備蓄していた米が底をつく状態になりました。島の有志が、船を出し、根室まで米を買いに行くことにしたそうです。根室で米を買い、島に帰りましたが島を目前に島民が見守る中、船は横波に飲まれ沈み、全員死亡しました。その中に曾祖父がいたのです。祖母は引き上げるまで月命日には船が沈んだ丘の上から冥福を祈っていたそうです。そんなわけで一家の中で島への思いは祖母が一番強かったのです。

祖母は「あの島は俺の島だ。もう一度島に戻り、家族全員で暮らすのだ。」といい続けました。島のことや家族の生活を良く話してくれました。私は島を見て、そんなに帰りたいのか。どうしてそんなに拘わるのかと不思議でした。

強制送還されて20年後の冬、祖母は納沙布岬に近い川に身を沈めました。島に帰りたい思いを、あんなに抱いていたのに何故。島を追われ大切な息子も失った。祖母の心はボロボロだったのでしょか。私は、祖母が帰りがたがった島に帰る努力をしようと心に誓いました。

現在、北方領土への訪問は元島民の墓参・元島民の自由訪問、それにビザなし四島交流

です。四島交流では、齒舞群島を訪れることが出来ません。それは一般のロシア人が住んでいないからです。従って、墓参と自由訪問の枠で故郷を訪問します。墓参に参加できるのは先祖が島に埋葬されていなければなりません。自由訪問は、島に居住していた方々の関係者が訪問できます。

平成元年、墓参団員として生まれ故郷に渡りました。島の浜辺で耳にしたのは波の音と波が運ぶ小石の音でした。母がお嫁に来た時に、波の音が耳に付き眠れない日が続いたと言っておりました。この音だ…「故郷の音」です。小石を両手ですくいました。私の「故郷」。祖母があんなに帰りがたがった島です。止め処も無く涙が流れました。出来ることから「家族全員で来たかった」。

拾った石は今も身につけています。挫けそうになった時に勇気を与えるお守りの石です。島を離れる時に、海水をすくい口に含みました。海水ですから塩辛いのは当たり前ですが、私たち島民の人生のように苦かったです。

2年前に自由訪問で島に行きました。その時、団員の中に目が不自由な方と、杖を付いた80歳を超えたご老人も参加しました。齒舞群島は、上陸するには洋上で2回船に乗り換えなければなりません。大変危険です。悪天候で波が高く、故郷の島を前に上陸は困難な状態でした。止む無く一日目は上陸予定地を変更しました。二人は甲板でジッと島の方を見ていました。ご老人は「杖を付き、歩くのもままならない。皆に迷惑をかけるが死ぬ前にどうしても故郷の島に来たかった」と一言。明日波が収まることを祈りました。

翌日、波のうねりは収まっていないが上陸する事になりました。全員で、抱えるようにして洋上の乗り換えを補助しました。やっと無事上陸できました。

目の不自由な方は、奥さんと孫が寄り添い石原をゆっくりと進みました。背丈を超える草が生い茂る急な傾斜地は若い団員が手を取

り前に進みました。やっと見晴らしの良い草原にたどり着きました。大きく息を吸い故郷の香りを確認していました。「川はどっちに見える？斜め左の方だ。」団員が彼の手を取り方向を知らせました。「それならここが我が家の跡地だ。」彼はジッと佇んでおりました。目には見えないが心の目は故郷を映し出していたのでしょうか。

杖を付いたご老人も、家の跡に行くことが出来ました。島を離れる時に、二人は何時までも甲板に立ち尽くしておりました。ご老人の姿が祖母と重なりました。

昨年も墓参団の一員として島に行きました。草生す丘の上から海に向かい、祖母の思いも含めて手を合わせました。なんでこんな辛い思いをしなければならいのでしょうか。島に帰りたいと言いつけながら、他界する人がこれ以上増えないうちに解決してほしいです。

北方領土を故郷にする私たち島民は、皆一緒に島に帰ろうと励ましあい、生きてきました。北方領土は、択捉・国後・色丹・齒舞群島の四島です。昨今、切り離して協議されそうなことも聞こえてますが、こんなことがあってはなりません。

そして、北方領土は私たち島民のみならず、日本国民の大切な領土です。皆さんの島です。自分の国の問題としてしっかりと受け止め、本日の話しを少しでも活かし、ご婦人らしい発想で返還要求運動に取り組んでいただきたくお願い申し上げます。



引き揚げの時、ここから貨物船に乗った…

## 北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟 永田 しのぶ

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の永田でございます。

本日は、長崎県地域婦人団体連絡協議会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」が開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動を、県民の先頭に立ってご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしぶりを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

ここで、北方四島について、少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島は大きな島で、それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて5,036平方キロメートルもあります。

長崎県の面積が約4,104平方キロメートルですから、四島を合わせると長崎県よりも広い面積となります。また対馬の面積は696平方キロメートルですから、対馬を2つ合わせても、また沖縄本島よりも国後島の方が大きいのですから、国後島や択捉島が大きな島だと

いうことが、お分かりになっていただけたと思います。

北方四島は、第二次世界大戦が終戦したにもかかわらず、1945年8月下旬から9月上旬にかけて、ソ連が不法に占領したことが、北方領土問題の始まりであります。

この不法占領に対し、その年の12月、当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、不法に占領された四島は、日本固有の領土であることを、連合国の司令官マッカーサー元帥に直訴したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件などが続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があり一日も早い解決が望まれます。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、特に昨年の政権交代以降、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われるようになりました。

北方同盟としましても、これまで以上に関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

では、北方同盟の主な事業をご紹介しますと思います。

北方同盟では、

1 世論の結集と啓発活動、2 返還要求運動推進活動、3 後継者育成活動、4 北方四島交流事業の4つの柱立てをして、事業を進めております。

このうち、3 後継者育成活動について、ご説明させていただきます。

北方領土が不法占拠されて65年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおり、それとともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切です。

後継者育成事業についての取り組みの1つ目は、「北方領土教育実践普及活動事業」です。

これは次世代を担う青少年に、教育現場で北方領土問題を正しく理解してもらうため、全道の小中学校の教師を対象に教育現場の情報共有などについて意見交換してもらうこととしております。

2つ目は、「第25回“北方領土を考える”高校生弁論大会」であります。

北方領土問題に関心を高めてもらうため、全道の高校生を対象に弁論大会を開催しております。

なお、この弁論大会で最優秀賞及び優秀賞を受賞した生徒は、後日、総理大臣を訪問し、総理に弁論大会の報告をするとともに、激励を受けることとなっております。

次に3つ目ですが、「北方領土学習資料の作成」です。

文部科学省の学習指導要領では、小学5年

生から北方領土が学習対象となっていることから、北方領土問題の正しい知識と理解を深めてもらうため、「小学生向け学習資料」を作成し、道内の小学校5年生全員に配付しております。

なお、今年度からは中学生用の学習資料も作成し、全道の中学校へ配布する予定でおります。

最後に4つ目、「北海道北方領土教育者会議」でございます。

これは、道内の小・中学校での北方領土問題に関する教育の推進に向け、道内の北方領土教育における研究・実践者のネットワークを構築すると共に、北方領土教育を促進する環境の整備を図っております。

以上、北方同盟が進めております北方領土返還運動について、雑駁ではございますが、ご説明させていただきました。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところ です。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

## 【茨城県会場】

- 開催日時 平成22年6月8日(火) 13時00分～14時30分
- 開催場所 水戸市三の丸庁舎
- 開催団体 茨城県地域女性団体連絡会
- 参加者 150名

### 元島民二世の訴え



## 島への想いを継ぐ

### 神林美砂さん

みなさんこんにちは。ただいまご紹介いただきました神林美砂と申します。

本日は、こうしてたくさんの方にお集まりいただきましたことにお礼申し上げるとともに、北方領土返還要求運動にご理解とご尽力いただいていることに敬意を表します。

茨城・水戸と言いますと、ストレートにイメージするのは、梅・納豆・水戸黄門…ですね。現在、択捉島に住んでいる私の知り合いのロシア人女性に、納豆が大好きでストックがあると毎日食べている人がいます。ピザなしなどで訪問の際に買って冷凍しているそうです。健康にも美容にも良いし、何と云ってもおいしいからだそうです。外国人に平均して言えることだと思いますが、納豆や梅干しは苦手。梅のはちみつ漬けや梅酒ならいける、といった人が多いですね。

今年の秋に、茨城県では北方四島に住むロシア人のピザなし受け入れの予定と伺っております。「食」は言葉のいらない最も身近な交流です。ホームビジットや交流会で接する機会がありましたら、ぜひ聞いてみたり食べさせてみたりしてはいかがでしょうか。

私は根室で生まれ根室で育ちました。母は

歯舞群島・志発島の出身です。子供の頃、納沙布岬から見えるあの島々には大きくて、怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では、小学校の高学年になると社会の時間に「北方領土」の授業があり、地理的なこと、歴史、戦前の暮らしぶりなどを学びました。

返還運動に関わってからは18年。その間様々な機会を与えられました。本日は私が見聞きしてきたことをお話ししてまいります。

始めに、北方領土の概要についてお話しします。戦前四島には17,291人が住んでおりました。漁期には多くの出稼ぎの人もいたそうです。人々は海からの豊かな恩恵を受け暮らしていました。

国後島は沖縄本島より少し大きく、択捉島はその約2倍、この二島で四島の93%の面積を占めています。この二島は山々が連なり、多くの川が流れ雄大な大自然の島です。国後島の爺爺岳は四島最高峰の美しい山です。島の北東・択捉島側にあります。私が小学6年生の時に大噴火し、根室にも真っ黒な火山灰を降らせて傘をさして学校に行きました。択捉島の太平洋側には、真珠湾攻撃に向かう連

合艦隊が集結した単冠湾、そしてオホーツク海側には昭和20年8月28日、ソ連軍が四島で一番初めに上陸してきた留別があります。

色丹島は、なだらかな丘が続く緑の美しい島。アナマ湾は深く切れ込んだ良港で、昔も今も嵐の時の船の避難港です。歯舞群島は起伏が少なく、私たちはせんべい島なんて言っていますが、主な五島(水晶・秋勇留・勇留・志発・多楽)で周辺には、海鳥や海獣類の多く生息する大小さまざまな岩礁があります。

当時は冷凍技術がありませんから、獲れた魚介類は塩蔵したり、缶詰に加工していました。またみなさんおなじみの昆布は、とても良質なものでした。今もですよ。志発島では、昆布と並んで乾燥帆立貝柱もたくさん作っていました。学校帰りに干してある貝柱をポケットいっぱい詰めて、食べながら帰ったそうです。ここに志発島から私が持ち帰った貝殻があります。(みなさんに見せて)。すごく膨らんだ貝殻です。そうです。貝柱がとても大きかったのです。

昭和の初め、択捉島では豊漁が続き景気が良く、畳の下にお札が敷いてあったという話も聞きましたし、三越の通販で買い物をしていたそうです。択捉島に残っている2つの日本時代の建物(会場から「水産会と郵便局」と声があがるそうです。これらもこの豊漁の時期に建てられたものです。また、カニ缶の酸化防止の白い紙は、国後島の缶詰工場が始まりと言われていました。

歯舞群島と国後島は、主に根室の経済圏で、物資は根室から入っていたようです。択捉島には函館からの船が入っていました。先程お話しした単冠湾は冬でも結氷しなかったので、1年中物資や郵便が途絶えなかったそうです。

豊かなのは水産資源だけではありません。先程少し触れましたが雄大な自然です。わかりやすく言うと、知床が何十もある感じです。山・川・森・高山植物・滝・湖・温泉、そこにはクマ・海鳥・シャチ・鯨・ラッコなどの

生き物が生息しています。現在もロシア人居住区を除き、ほとんどが手つかずの大自然ですが、近年の開発と資源の乱獲でこれらは壊されつつあります。こういった環境面からも返還を急がなければならないのです。

私はビザなし交流の始まった年に、島に行く機会を得ました。先程お話ししたような、子供の頃のイメージを持ったまま参加しました。とにかく行ってみようと思ったのです。

初めて見た国後島・古釜布。霧の中、湾にはたくさんの沈船が放置され、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見えるこの島をなぜロシアは返さないのか。これが「知床旅情」で歌われている「遙かなしり」なのか…。錆色の景色を見て一番始めに感じたことです。択捉も色丹も同じように錆色でした。

天気が良くなると、青い空、あふれる緑…すばらしい自然を感じる事が出来ました。ロシア人も明るく、子供の頃から持っていたイメージを捨てるのにそれほど時間はかかりませんでした。

この初めての訪問で、私は択捉島出身のおじいさんに出会いました。

私たちは運悪く嵐に遭い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊することになりました。そこはおじいさんの故郷の村の沖合でした。嵐に遭わなければ目にもすることもなく、夜中に航行するはずの場所でした。

大きく揺れる船で、島のことをたくさん話してくれました。そしてずっと島を、故郷を見ていました。天候が回復し、夜中に船は碇を上げました。その際、元漁師だったおじいさんが「あの山の雲が取れば風向きが変わる。そうしたらGOだ」と船長さんにアドバイスしたそうです。おじいさんは真っ暗なデッキに出て、島で眠る家族に「般若心経」を唱えたと翌朝聞きました。

私はおじいさんに言われました。「ねねこ〜(おねえちゃん)、オレはもう(島に)来られない。後は頼むぞ」「そんなことないよ、

また来られるから」と返しましたが、胸がいっぱいになりました。サケは生まれた川に戻ってきます。「サケになってでも帰りたい」と言っていたのですが、叶うことなく亡くなりました。

私は、2007年に家族で初めて志発島の元居住地に行きました。同じ地区に住んでいた人たちが「ここ、あんたのトコ」と教えてくれたり、初対面の人から亡くなったおじやおばの話の話を聞きました。

先程、帆立の貝殻をお見せしましたが、他にもあります。生活していた証のお茶碗のかけら、これは石炭、たぶん海底に鉱脈があって波で削られて打ち上げられているらしいのですが、戦前も拾って燃料にしていたそうです。子供の頃を思い出しながら集めていました。それと「多楽石」と元島民が呼ぶ石、メノウの一種だと思うのですが…これは本当に波打ち際でひときわ輝いて見えて、みんなでじゃぶじゃぶ水際を下ばかり見て、必死に探しました。

占領された1945年9月には、母の家族は祖母の姉のところへ皆行って、島には誰もいませんでした。でも、祖父の大きい船が沖留めされていて、ソ連兵が島の反対側に行っている時にその船で女・子供だけでも根室に逃そうということになり、地区の人たちが乗れないほど集まったので、さらに小船を引き、船は根室に向かったそうです。占領後初めての多勢の引き揚げということで、島の様子を知りたい役所や多くのマスコミが船を迎えたそうです。

その船に乗っていた、一家の末の妹さんが私に言いました。「私は島を出てから生まれたのだけれども、あなたのおじいさんの船に家族が乗らなかったら、私は今ここにいなかったのかもしれないのよ」と。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯し、エビの漁期にだけ来るロシア人がいるだけです。ビザなし交流に参加した時も同様ですが、元島民の方々は、ただた

だ島を見えています。私たちには見えない昔の景色や家族を見ているのです。その想いが伝わるほど切なくなります。私はできる限り、現地で元島民のお話を聞くようにしています。島への想いをより強く感じるからです。

みなさんもそうだと思うのですが、故郷というのは年を取れば取るほど懐かしく、恋しくなるもの、ですよ。年を取って自分の生きてきた月日を振り返ったり懐かしんだりすると、必ず故郷を思い出します。出てきたっけりで自由に行けなくなればなおさらです。

島からの引き揚げ方は様々です。歯舞群島の島々や、国後島の北海道に近い地域などからは、嵐の夜やソ連軍の見張りが手薄になった時などに、命がけて根室目指して逃げてきた人も少なくありませんでした。また送り込まれてきたソ連人とともに暮らし、寒い時期に劣悪な環境の引き揚げ船で樺太経由で函館に送られた人、なかには村を出て函館に着くまで3ヶ月かかった人。家の子供が皆小柄なのは、引き揚げ時とその後の栄養が足りなかったからだという人。病気になったり、定住地がなかなか決まらず、引き揚げ後も大変だったそうです。すぐに帰れると思っていた。残るとソ連人にならなくてはいけなかったと言います。

私たち元島民2世や3世は「後継者」と呼ばれています。65年経っている事の後を継ぐなんて、という思いです。一日も早く解決して欲しいのです。でも現実問題として、まだ時間がかかるのなら二島や面積ではなく、北



方領土は四つで「北方領土」であるということ  
を崩さず、今日お話しさせていただいた「島  
への想い」を心の核にしっかり継いで今後も  
返還運動していくことです。それぞれの元島  
民が抱いている「島への想い」を聞き伝え、  
力にしたいのです。

島を返せというが、日本人は今更この便利  
とは言えない島に住めるのか？と聞くロシア  
人もいます。そういう理屈ではないのです。

#### 元島民の訴え



## 四島（しま）とわたしの思い出

「はじめに」

「ズドラーストヴィチェ！ ミニヤザヴート  
志代子 三船 ヤ ラヂラーシ ヴ 択捉 薬  
取 ラーダ パズナコーミツァ！」こんに  
ちは！ 三船志代子と申します。私は択捉島、  
薬取で生まれました。どうぞよろしく。

このカタカナロシア語を一生懸命覚えて、  
先月5月14日から17日までの3泊4日の平成  
22年度第一回ビザなし交流に参加して、国後  
島に行っていました。

現島民のロシア人は、皆笑顔で私達を迎え  
て下さいました。ロシアの人たちは終始友好  
的で、4日間、景勝地を案内してくれたり墓  
参のほか中央病院、図書館、博物館、学校、  
測候所、裁判所、建設中の飛行場などの見学  
をさせて下さいました。

また、ホームビジットでは食べきれないほ  
どの手作りのご馳走やプレゼントの交換、歌  
の交換など時間を忘れる程の楽しい一時でし  
た。住民との交流会では、日本側からは絵手  
紙、折り紙の指導、私達はロシアの伝統文化  
である「ウラルシベリア塗」を習っていました。

故郷だから帰りたい。ただそれだけなのです。

「想い」を持って運動することは、また新  
たな力になると思います。そして一日も早く  
この問題が解決することを信じ、お互いがんば  
っていきましょう。この「想い」は、この  
後三船さんがお話しして下さいますので、  
みなさん、充分感じて今後の活動の心の核と  
していただきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

### 三 船 志代子 さん

根室に帰港してから、入港税の問題や取材  
制限など色々あったことを知りました。しか  
し、一般の団員は訪問中何も知らされておら  
ず、楽しい交流ができたと思っております。

では、私の生まれた択捉島薬取村はどんな  
ところだったのか？ ここに『ばあちゃんの  
しべとろ』という絵本があります。この絵本  
は平成13年度北海道・根室支庁が四島を知っ  
てもらうために一般公募し、最優秀賞に選ば  
れたものです。作者は、文章は私・三船志代  
子、絵は娘の同級生の「林マキ子」さんです。  
和む素敵な絵は、私のつたない文章を引き立  
ててくれています。ここで読んでみますので  
聴いて下さい。

（『ばあちゃんのしべとろ』朗読）

この絵本は、私の幼かった頃の記憶、だん  
だん薄れていく記憶を思い出しながら綴った  
ものです。この本が最優秀賞に選ばれてから  
色々心配になり、親は既にこの世にはなく、  
先輩に当たる方達に確認したところ、薬取村  
のことがよく描けていると認めてくれました。

今はハマナスの花咲く砂地になってしまっ

た薬取、昔栄えていた薬取を引き揚げることになりました。昭和22年8月のことです。

引き揚げるとき、私は小学3年生、8歳でした。小さかったので多くの元島民の方達がしたような苦勞のお話は私自身の記憶にはないのでございます。引き揚げの通達が出て、出発までどのくらいの時間があつたのか、2、3日か、数日あつたのか。慌ただしく荷物をまとめ、引き揚げる人々は岩山を越えた船着場である「ソキヤ」というところに集結させられました。

引き揚げる人は、村の住人の半分だけでした。どのようにして人選されたのかはわかりません。例えば、老人がいる家族とか、小さい子供がたくさんいる家族とか、また単純にロシアの命令だつたのか。残された人々は、昭和23年に引き揚げることができましたが、さらに1年間ロシア人と共同生活をする事になりました。

引き揚げのとき私の家族は、父、母、4人の子供の6人でしたが、他に夫を亡くしたおばさんの家族8人も一緒でしたから、14人の長として父は大変だつたと思います。

引き揚げ船に乗る時は、薬取は択捉島の最も北に位置していたので、私達薬取の人達が最初に乗船しました。薬取の海は遠浅で、大きな船は沖に停泊し、舢舨（ハシケ）で乗り降りしなければなりません。この舢舨に荷物と一緒に乗せられた私は、生まれて初めて船に乗るので、うれしくなって澄んだ海の底を覗いてはしゃいでおりました。でも不安そうな大人の顔、既に船酔いでもどす人など色々でした。

それから引き揚げ船には、次々と何日もかかって島の引き揚げ者を乗せました。船はロシアの貨物船でした。船底から甲板まで人で一杯になりました。しかも、船の中は不衛生で、蚤、虱、南京虫など、その他トイレのこと、飲み水のこと、食べ物のことなど不潔で不自由なことがいっぱいでした。

例えばトイレのことですが、トイレは臨時

に作られたトイレで船の甲板にありました。甲板に上がるには、まっすぐな鉄の梯子を上るしかありませんでした。これに素手でつかまり、上ったり降りたりします。汚れた手を洗うことなど出来ません。子供心にも気持ちの良いものではありませんでした。この梯子を上れない小さい子供や病弱な人々は、大人の人々が持ってくる用意された一斗樽を使用しました。一杯になると天秤棒で担ぐようにして、力持ちの男の人達が片付けてくれました。

私達を乗せた引き揚げ船は、根室の港ではなく、樺太（現サハリン）の真岡港に着き、上陸させられました。宿舎となる女学校まで、延々と続く道をひたすら歩きました。大人も子供も老人も、小学3年生の私にとっては、背中に大きなリュックサックを背負っているので、とても辛いものでした。すぐ下の妹は小学1年生と一緒に歩きました。その下の妹は4歳で、父の背負った荷物の上に肩車。その下の妹はまだ乳飲み子で、母がおんぶしていました。そんな格好で、他の人々も皆ただただ歩きました。

宿舎になった学校は、まだ9月上旬というのに寒くて眠れない夜もありました。しかもトイレが外で、また遠い所にありました。途中、ロシアの兵隊さんが銃を持って監視しているのです。とても恐かったです。トイレが間に合わず、途中座り込んでシャーと用を済ませたことも何度もありました。

引き揚げの時の荷物も制限されました。それで一番大切な物だけ持ちました。私はリュックに「仏様」と下着を持ちました。

他の家の人々は、着物でも留袖とか振袖とか、良い物をたくさん持ちました。しかし、これらの荷物は真岡で移動の時に全て盗まれてしまいました。荷造りの仕方で中身が何なのか、大事な物が入っているということがわかってしまったようです。

父はアルバム4冊と蓄音機を持ちました。途中で荷物検査があつても、カメラのないアルバムやレコードのない蓄音機などは、無事

荷物検査を通過したようです。これが日本に来てから大変活躍することになりました。また、アルバムに貼ってあった写真は、父が自分で映したものが大部分でした。その当時、薬取で父がただ独りカメラを持っていたからです。写真の現像なども暗室に入って自分でしていたようです。

戦後、千島連盟で作った写真集の中の「薬取村」の写真は、父のアルバムから提供されたものが多いです。その他各方面で使われました。現在のようにコピー機がない時代、写真を貸しても戻る時、戻らぬ時がありました。父の所へ行けば写真があると聞いて訪ねてきた人が大勢いました。そのアルバムは父も他界し、あちこちはがされたまま、ほろほろになって実家に残されております。

蓄音機のほうは島にいた時は「浪花節」をかけ、父の友人が集まり、ストーブを囲んで寝転がって聴いておりました。引き揚げてきてからは、娯楽の少ない時代でもあり、村のお祭り「演芸会」など何年も使っていたようです。その他保育所でも使っていたようです。その後どうなったものやらわかりません。

島を8月に出て、真岡ではお腹が空いて、寒くてトイレが遠くて困ったことくらいしか記憶にありません。

9月の中頃、しばらく函館港に入港しました。しかし、赤痢や麻疹などの伝染病が流行り、上陸できず、船の上で一週間くらいいました。その後、上陸しましたが、みんな栄養失調のような状態で多くの人々が亡くなりました。病院に入院しても、食べ物や良い薬もなく、亡くなる人が多く出ました。

私の村の村長さんの娘さん2人も亡くなりました。10代のお兄さん2人で妹の亡骸を一人ずつ背負って焼き場に行き、火葬してもらったそうです。村長さんは引き揚げの時、村民の半分を残してきたため、次の年、次の引き揚げ船が来るまで、村人が無事に引き揚げてくるかを確認するまで函館を動こうとせず、連合軍の占領下でもあり、公職追放令で

公職にも就けず、10代の息子さん2人のアルバイトだけの大変苦しい生活をしたそうです。

一緒に引き揚げた人々は、それぞれの親戚縁者を頼って全国に散って行きました。ちなみに引き揚げの時、一緒だったおばさんの家族は無縁故ということで、網走管内の小清水町に行き、引き揚げ者住宅に住み、皆で働きました。皆で働いても父親のない家族は生活が苦しく、その子供たちが独立するまで、父は折に触れ生活を助けていたようです。その頃、私は幼かったので、父や母の加護のもと、少々寒かったりお腹がすいたりしても幸せなものでした。

父は引き揚げてきて、根室管内の別海町西春別の郵便局に勤務することができました。西春別という所は軍馬補充部があった所です。戦後、軍馬は不要になったため、従事者も移動を始め、官舎も空くようになっておりました。私達はこの空いた官舎に住めることになりました。この地区は戦後、各地からの引き揚げ者や復員家族など多くの人々が開拓に入った所です。父はそれらの人々の所に郵便を届けるのですが、番地もわからない。人も知らない。悪路の中歩いて郵便物を届けました。

冬が近くなり、寒くなってきた頃、食べ物がない我が家では父が配達途中、農家の出窓などに南瓜を積んであるのを見つけると、1個分けてくださいと頼んでもらってきて私達子供に食べさせてくれました。

翌年からは慣れない畑仕事もしました。大根、人参などの野菜や、いも、南瓜、とうきび、蕎麦なども作りました。鶏も飼いました。小学4年生になった私もいっぱい手伝いました。

薬取では魚はたくさん獲れました。世界の三大漁場の1つと言われておりましたから。漁業権は函館の日魯漁業の関係の人が持っていたようです。村の人々はここで働きました。魚が獲れる夏になると、出稼ぎの人も多く来

て働き賑わっていたようです。小さな村でしたが、特に戦前は賑やかで豊かな暮らしのようでした。冬が来て、漁が終われば村の主な人達で歌舞伎を上演したそうです。村人は会場の公会堂にご馳走を持って集まり、楽しんだようです。これらの様子は、父のアルバムにありました。

ところが戦後、昭和20年8月末にロシア人が上陸してきました。詳しいことは知りませんが、我が家の前に村役場があり、人々の出入りはよくわかりました。しかし、カーテンを閉めて見てはいけない！と言われました。大人の人々がヒソヒソ話しているので、子供心にも何かあったと思いました。しばらくした頃、夕方、なぜか賑やかなので外を見ると、ロシアの兵隊さんが踊っていました。1人がアコーディオンを弾き、かわるがわる1人または2人で、いま考えるとコサックダンスをしていました。とても陽気な人々という印象でした。

間もなくロシアの家族連れが村にやってきました。しかし、住む家がありません。それで私達は日本人の家を半分にして前後で住みました。学校も半分にしました。そのため、学芸会など学校でできず、お寺の本堂に舞台を造り、歌や踊り、劇などをしました。このお寺は立派なもので、厚岸の国泰寺が北海道有形文化財なら、それよりもっともっと立派だったと亡き父が話しておりました。

また、絵本に登場したお地藏さんは、その昔高田屋嘉兵衛が北海道に地藏6体を寄贈したことがあるそうですが、その内の1体であったことを知りました。

小さかった私が島で楽しかったことは、海遊びでした。夏になると川尻近くの海は浅く、子供達は泳いで遊びました。きれいな砂浜が続き、浅い海にはカレイの子がたくさんいて、砂の中に体を隠して頭だけ出して目が光るので、すぐに見つけることができます。これを子供達は足で踏んだり手拭いを広げてすくって遊びます。カレイの子は素早く砂を舞い上

げ逃げ回り、子供達にはなかなか捕まりませんでした。岩場に行くと花咲ガニがいっぱいいました。これを捕まえて遊ぶのですが、とても面白かったです。

父は平成13年2月7日に亡くなりました。この日は「北方領土の日」です。93歳でした。私はこの年の6月に自由訪問で薬取に行ってきました。父が亡くなる少し前、今年は薬取行き自由訪問があるという知らせを聞いたので、病床にあった父にこのことを話しました。

「父さんの代わりに私が行ってくるよ！」ところが父は、何と聞いたのか「お前が行くならおれも行くよ」と言います。「でも父さん、元気になって退院できたら、次に2人で行こうよ」父は「医者には内緒だけど、おれの足、ちゃんと動くんだよ。歩けるんだよ」と言って、動かない足を一生懸命動かしているようでした。「わかったよ、父さん。申込書、書いて申し込んでおくよ」と嘘の会話をしました。

それから間もなく父は亡くなりました。このため私が自由訪問に参加したとき、体が動かなくなっても薬取に行きたかった父の気持ちを思い、父の写真を持参しました。私にとっては特別な複雑な気持ちの自由訪問となりました。北海道が主催する北方領土墓参は、昭和39年から始まり、なか10年の中断があり、昭和61年から再開されました。薬取には平成2年に初めて行くことができました。この時、薬取墓参団員の中で、父が一番の長老で水先案内役を務めました。翌平成3年にも薬取の墓参があり、私はこの時初めて父と参加し、45年ぶりの故郷訪問となりました。父はその後、自由訪問などで薬取に行くことができたが、最後は足も弱っており気力で歩いていました。

この自由訪問を終えて、まもなく根室支庁の担当者からスナップ写真をたくさん送っていただきました。と同時に絵本コンクールの作品募集のチラシが同封されておりました。

私は作文も絵も全くダメなのに。父の生まれた薬取、父が死ぬまで行きたかった薬取。私自身も生まれた自然豊かな薬取。コンクールに応募する気持ちが決まらないうちに、新聞折込のチラシの裏に書き始めておりました。

8月、父の初盆で子や孫達が集まった中、みんなに話したところ「絵はどうするの」と笑われました。文も書けたのだから、また父の古い写真も参考になるし、自分で描こうと思いました。

ところが描けるものではありませんでした。メ切も迫っているし困り果て、考えた末、娘の同級生の林真紀子さんに依頼しました。彼女に快く引き受けていただき、ギリギリながらメ切に間に合いました。

審査の結果、思いもよらなかった「最優秀賞」に選ばれました。この絵本は、後に昨年4月に亡くなったノンフィクション作家の上坂冬子先生の目にとまり、たいへん褒めていただきました。また、民間のTV放送『レディス・フォー』の中で全国で紹介して下さいました。さらに、上坂先生のご尽力により、一般書店でも売られるようになりました。この時、序文も書いていただきました。上坂先生自身の著書『北方領土上陸記』の中でも取り上げていただきました。また、この本の表紙には、絵本の1頁の絵を使っていただきました。そしてこの絵本はロシア語にも訳されました。

母は大正4年12月、同じ択捉島の年萌（としもえ）というところで生まれました。年萌は択捉島の太平洋側にあり、単冠（ひとかぶ）湾に面しております。単冠湾は、第二次世界大戦のきっかけとなる真珠湾攻撃のために日本艦隊が集結したところです。

母は昭和9年に薬取の父のもとに嫁入りし、昭和22年引き揚げ、平成19年5月、父と同じ93歳で亡くなりました。この間、一度も年萌にも薬取にも行きませんでした。また、一度も帰りたいとは言いませんでした。

しかし、母が病気で入院していた時、痴呆になり幻覚の症状が現れた時のことです。私がお見舞いに行くと、母は私を待ちかまえており、「お医者さんがネ、退院してもいいと言うけれど、こんなに時化（しけ）ているのにどうして家に帰れと言うのよネ」私はびっくりしました。外は晴れており、良いお天気です。私は「ん？」と母の顔を覗きました。母は「あっ！そうだ。陸廻（おかまわ）りで帰れば良いネ」と言って両手をパチンと叩き、うれしそうにしておりました。私は何のことかさっぱりわかりませんでした。それで「母さん、今何と言ったの？」と聞きました。母は急に我に返ったというか正気に戻ったようで、自分が今何を話していたのかわからないようでした。しかし、私はすぐに理解することができました。母はこの時、半世紀も帰っていなかった故郷・年萌のこと、幼かった頃の楽しかった思い出に耽っていたのでしょう。

さらに母の病状が進み、徘徊に似た症状になったとき、幻覚もあり「お願い！そこの船着場の舳に私を乗せてください」と叫んで、介護士さんを困らせておりました。

父が薬取に行きたかったこと、母が年萌に行きたかったことなどからもわかるように、人間、生まれた故郷に帰りたい！行ってみたい！という故郷を懐かしむ思いは、老いて病気になっても心の中に強くあるものと感じました。

四島（しま）に住むロシア人は変わりました



た。初めて墓参で島を訪れた平成3年頃は、写真撮影も制限されたり、警備隊が銃を持って着いてきたり、ずいぶん怖い思いもありました。しかし、今では墓地の草刈りをしてくれたり、カニを茹でてご馳走してくれたりします。軍人や警備隊は、もう島にはいないようです。島の暮らしは豊かなようで、住民の

服装も以前とは違いきれいでした。お店の棚にも商品がたくさん並んでおりました。飛行場の建設、港の拡充、道路の拡幅工事などさかんに行われておりました。父も母も生きていたうちに四島は戻りませんでした。せめて私が元気なうちに返還されることを祈り、お話を終わります。

## 北方領土返還要求運動

# 北方領土返還要求運動について

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の山崎でございます。

本日は、茨城県地域女性団体連絡会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」が開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動を、県民の先頭に立ってご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしぶりを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

ここで、北方四島について、少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて

## 北方領土復帰期成同盟 山崎 隆

5,036平方キロメートルもあり、大変大きな島です。

茨城県の面積が約6,095平方キロメートルですから、四島を合わせても茨城県より二回りほど小さい面積ですが、国後島や択捉島は沖縄本島よりも大きな島で、特に択捉島は日本国内の中で一番大きな島であります。

北方四島は、第二次世界大戦が終戦したにもかかわらず、1945年8月下旬から9月上旬にかけて、ソ連が不法に占領したことが、北方領土問題の始まりであります。

この不法占領に対し、その年の12月、当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、不法に占領された四島は、日本固有の領土であることを、連合国の司令官マッカーサー元帥に直訴したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件などが続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があり一日も早い解決が望まれます。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、特に昨年の政権交代以降、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われるようになりました。

北方同盟としましても、これまで以上に関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

では、北方同盟の主な事業をご紹介しますと思います。

北方同盟では、

1 世論の結集と啓発活動、2 返還要求運動推進活動、3 後継者育成活動、4 北方四島交流事業の4つの柱立てをして、事業を進めております。

このうち、3 後継者育成活動について、ご説明させていただきます。

北方領土が不法占拠されて65年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおり、それとともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切です。

後継者育成事業についての取り組みの1つ目は、「北方領土教育実践普及活動事業」です。

これは次世代を担う青少年に、教育現場で北方領土問題を正しく理解してもらうため、全道の小中学校の教師を対象に教育現場の情報共有などについて意見交換してもらうこととしております。

2つ目は、「第25回“北方領土を考える”高校生弁論大会」であります。

北方領土問題に関心を高めてもらうため、全道の高校生を対象に弁論大会を開催しております。

なお、この弁論大会で最優秀賞及び優秀賞

を受賞した生徒は、後日、総理大臣を訪問し、総理に弁論大会の報告をするとともに、激励を受けることとなっております。

次に3つ目ですが、「北方領土学習資料の作成」です。

文部科学省の学習指導要領では、小学5年生から北方領土が学習対象となっていることから、北方領土問題の正しい知識と理解を深めてもらうため、「小学生向け学習資料」を作成し、道内の小学校5年生全員に配付しております。

なお、今年度からは中学生用の学習資料も作成し、全道の中学校へ配布する予定であります。

最後に4つ目、「北海道北方領土教育者会議」でございます。

これは、道内の小・中学校での北方領土問題に関する教育の推進に向け、道内の北方領土教育における研究・実践者のネットワークを構築すると共に、北方領土教育を促進する環境の整備を図っております。

以上、北方同盟が進めております北方領土返還運動について、雑駁ではございますが、ご説明させていただきました。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところでは、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

## 【福島県会場】

- 開催日時 平成22年7月5日(月) 10時00分～12時00分
- 開催場所 郡山市男女共同参画センター
- 開催団体 福島県婦人団体連合会
- 参加者 100名

### 元島民二世の訴え



## 北方領土の早期返還を求めて

野 潟 龍 彦 さん

皆様こんにちは。ただ今ご紹介いただきました野潟龍彦と申します。本日お話しさせていただく機会を与えていただき、感謝しております。私は、北方領土返還を目指して運動を行っている社団法人千島齒舞諸島居住者連盟の二世又は後継者と呼ばれる戦後生まれの会員です。北方領土を目の前にする、北海道の根室市から参りました。短い時間ですが、お付き合いよろしくお願ひ致します。

私の祖父母・母は戦前まで国後島泊村のフルカマップで、越後屋という蕎麦屋を営んでおりました。祖父母・母も亡くなりましたが、私が中学生の時、母がフルカマップへの北方墓参に参加しました。たしか昭和41年と記憶しておりますが、そのことで祖父母・母が元島民と知りました。それまでは、あまり島の話は聞いていなかったのですが、墓参から帰ってきてから住んでいた時のことを話すようになりました。楽しかったこと、平和であったことは言っておりましたが、苦しかったことや悲しかったことは話さなかったと記憶しています。

ソ連国でペレストロイカが始まり、四島の返還を期待し、国後島の元島民の島意を一つ

にするため平成2年に国後島民の会が発足し、事務局長に選ばれました。私は38歳でした。その後、元島民・2世・3世の人達と北方四島返還要求運動を行っております。

それでは、元島民と私が所属する千島連盟についてお話しさせていただきます。先祖代々千島の島々で生活していた島民の方々は、終戦後ソ連軍が侵攻してくることを知り、危険を承知で一時的に自分たちで脱出避難した人達と、脱出避難が不可能だった人達と、古里に残った人達に分けられます。

戦後、南千島地域の島々は北方領土と呼ばれるようになり、その地域に住んでいた人たちを元島民と呼んでいます。北方領土とは、択捉島・国後島・色丹島・齒舞群島です。齒舞群島は、多楽島・志発島・勇留島・秋勇留島・水晶島・貝殻島の六島のことです。元島民は戦後、ソ連国により島々を追われ樺太(サハリン)の真岡収容所に抑留され、約3年8ヶ月の間に強制退去させられました。

千島連盟は、元島民とその方々の子孫が中心となって構成されている組織で、北方四島返還運動の旗頭として活動を行っております。北海道13支部、本州2支部、全部で15

支部があり札幌市に本部を置いております。そして、北方領土四島返還要求運動発祥の地根室市に、小さな会館ではありますが運動拠点として千島会館を構えております。

ここで、千島連盟が掲げている四島一括返還スローガンについて説明をさせていただきます。元々は、元島民の心情・感情論から言えば四島はすべて即時一括返還であります。しかしながら、近年の世界情勢や返還交渉の現状を考慮して、千島連盟は四島の帰属問題は一括して我が国の領土として解決し、返還の時期は政府が言っているように柔軟に対応する考え方になりました。苦渋の選択であることを皆様にはご理解していただきたいと思っております。

現在、島に渡る方法は、墓参事業、ビザなし訪問事業、自由訪問事業しかないのです。元島民は、65年経っても未だ故郷での生活ができない現状です。なぜなら故郷の島々が帰ってこないからです。

元島民の平均年齢は77歳となりました。北方領土返還要求運動の先駆けとなっている元島民は、高齢化というより老齢化が進んでおります。非常に口惜しいことですが、無情の歳月が流れております。未だに返還されない島々、政府の返還交渉に苛立ちを覚え、失望感を抱き、自ら行ってきた北方領土返還要求運動さえも意気消沈し、絶望感が漂い始めております。北方四島に戦前は、17,300人ほどおりましたが、古里を追われ、歳を追う毎に募る望郷の念、その一方で帰郷の夢が実現することなく、志半ばにしてこの世を後にした元島民は五割以上になっております。中国の詩人で杜甫(とほ)が書いた春望の一節に「国破れて山河あり」と詩がありますが、元島民には帰るべき古里がないのであります。

最近これらのことを考えると、領土問題が解決されるまで元島民の方々が、もっと自由に島々に往来できる制度を早急に確率して欲しいと思っております。それと先程も申しましたが、元島民の方々には非常に悲しいこと

ですが、限られたわずかな時間しかないのです。肉親の魂の眠る故郷の地に馳せる悲痛な願いを、元島民の方々が健康で活力のあるうちに、何としてでも叶えてあげたい。それが2世である後継者としての私の強い思いであります。

北方四島が返還されていないことにより、私の住む根室管内がどのような状況下に置かれているかをお話したいと思います。

根室は基幹産業が漁業を主体としており、お魚城下町であります。根室管内の海は、ロシアが主張する中間ラインに接しているため、漁獲割当量はロシア国との漁業交渉で決められます。これは無料ではなく、操業する漁業者が多額のお金を払って漁をしなければならないという現実があります。先程申し上げましたが、ロシアが主張する中間ラインは国境ではありません。

ロシア国が、一方的に我が国の北方四島を不法占拠し、北海道と北方四島との間にラインを設けているのです。一番近いところで、根室の納沙布岬から歯舞群島の一つ貝殻島で3.7kmしか離れておらず、その半分1.75kmと目と鼻の先にあるように中間ラインが引かれております。この中間ラインを巡って、現在も銃撃・拿捕事件が続いております。

最近では、羅臼で今年の1月29日に銃撃事件があり、根室では4年前の8月16日に拿捕事件が起きました。その際に、漁船員一人が機関銃で撃ち殺される事件が起きました。どのような事情があろうとも、武器を持たな



い漁船に対し発砲し、殺人を行うロシア国の蛮行を許せるものではありません。

平成4年からビザなし交流が始まり、人的にも交流が進んでいる中で、右手で握手、左手で機関銃を撃っているのです。根室管内は、まだ戦争が終わっていないのです。

私たち根室管内に住む者にとっては、領土問題の解決なくして戦後はありません。また、土地を追われ、海も奪われた人達のためにも、生活の場を取り戻すためにも、返還運動を続けていかなければならない。ロシア国に対する北方領土返還要求は、日本国家の威信と尊厳をかけた根幹の問題であります。我々国民

は一致団結し、解決されるまで粘り強く運動を続けていかなければならないのです。

私は、先程申しましたが、元島民の方々に対する想いと日本国民として当然の義務として、我が国固有の領土である北方領土返還要求運動を行っております。この運動にそれぞれの立場でご理解ご活躍されている皆様方、どうか今まで以上に力を結集していただき、大きなうねりとし国内はもとより国外に対しても北方四島返還要求運動の輪を拡大されることを願っております。

皆様方、領土問題解決まで共に戦っていきましょう。

## 北方領土返還要求運動

# 北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟 永田しのぶ

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の永田でございます。

本日は、福島県婦人団体連合会、郡山市婦人団体協議会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」が開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動にご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしぶりを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

当北方同盟は、北方領土の返還に関する国民世論の啓発と結集を図るとともに、我が国

の正しい主張を広く国際世論に訴え、平和的に北方領土の返還を促進することを目的としており、昭和40年4月に外務大臣許可の公益法人となり、現在に至っております。

ここで、北方四島について、少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて5,036平方キロメートルあり、大変大きな島です。

郡山市の面積は約757平方キロメートルですから、国後島は郡山市の約2倍の大きさになります。また択捉島は日本国内の中で一番大きな島であります。

北方四島は、第二次世界大戦の最中、日本

の降伏直前にソ連が中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に不法に占領したことが、北方領土問題の始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領を容認しましたが、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、その年の12月1日、当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことの出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件などが続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があります。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和

条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われております。

北方同盟では、関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

しかしながら、北方領土が不法占拠されて65年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおります。また、高齢化とともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切であり、後継者育成が重要な取り組みとなっています。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

## 【徳島県会場】

- 開催日時 平成22年7月20日(火) 13時30分～15時00分
- 開催場所 徳島県婦人会館
- 開催団体 徳島県婦人団体連合会
- 参加者 150名

### 元島民の訴え



## 「四島を返せ」いつまで続く元島民の叫び

眞 下 清 さん

北方四島の敗戦前の概況は、すでにパンフ等で詳細に説明されておりますから、今日は簡略に当時の生活実態等についてお話しいたします。

千島海域は、世界三大漁場の一つと言われており、海産資源の宝庫の海域で世界から注目されておりました。鮭、鱒、タラバガニ、タラ、イカ、ウニ、ホタテ、タコ、昆布、わかめ、ふのりなど、とくに昆布は国後島民の住民生活を全面的に支えていると言っても過言ではない。7月から9月にかけての3ヶ月間の漁で1年分の生活費の一切を稼ぐことになるから、夏場は家族全員が参加するのが習慣であった。

昭和20年8月15日敗戦の日も、我が家の働き手であった兄貴達3人が沖に出て昆布漁をしていた。私は小学校職員室前で玉音放送を聴きながら敗戦を知る。昨日まで、大本営発表での敵機撃墜日本軍勝利の報を信じていた子供達は、私と同じように「どうして日本は敗れたの」と半信半疑で校長先生に嘔みついたものである。

その時校長先生は、「戦争は終わった、日本は敗れた」と答えるのみで昨日の報道には

触れなかった。ただ涙を流しながら話している校長先生の悔しさだけが伝わってくるような気がした。

翌日、北方四島はソ連領になったとの報が入る。学校では校長先生から、「明日から学校閉鎖となる、みんなはどんなことがあっても絶対に死ぬなよ、必ず生きるのだ!!そしてどんなときでも学ぶことを忘れるな!!」「生きることは、学ぶこと」と何回も教えてくれた。このときの言葉は、私の人生訓にもなっている。ありがたいことだ!!

北海道や内地では「国破れて山河あり」と言えるが、島では「国破れて故郷はなし」となり、8月下旬頃から自主的に北海道へ逃避行が始まった。我が家も、親類の船に依頼して逃避行の準備に入る。

10月下旬頃、船の予約をしていたところ、その船が根室沖で逃避行中の島民を乗せたまま、台風巻き込まれ、転覆の事故が発生する。救助されたのは1名で、船長以下全員絶望との報せがあった。この逃避行計画は中断せざるを得なくなった。それでも船の予約に努力したようだが、10月以降ソ連軍の監視も厳しくなり、計画は全面的に見直すこと

となったようである。そして結果は、来年暮れに再計画するとのことで越冬を余儀なくされた。日本からの情報が皆無の中での越冬は、正直、両親や兄貴達の想いはどうだったのだろうかといつも考えていたものである。

母は「隣近所の家庭では、家族が分散して逃避行したところもあるが、我が家では家族は一心同体だ、どんなことがあろうとも全員一緒に行動するから安心しなさい」と言っていた。子供心に納得していたものである。

昭和21年春、接岸していた氷も溶け始め離岸が見られる頃、ソ連軍による船の没収が始まった。小さな伝馬船まで没収し焼却処分とされてしまい、もはや海に出ることさえも不可能となった。この時から3年間、抑留生活が続くのである。

若者は、木材の切り出しや、加工場に半強制的に動員される。子供と老人は、食糧確保でジャガイモ、カボチャや野菜の栽培に、昆布拾い、磯場での魚介類の捕獲など、とにかく食べるものは何でも集めることに集中して働いた。私は小川での岩魚釣り、磯場での魚釣り、乳呑路の音根別川（家から約20kmほど山奥に入る）で鱒、鮭が遡上するのを捕獲することが義務づけられ、週に2、3回友人達と馬で早朝3時頃母に起こされて出かけたものである。ソ連軍の監視もあり、帰りは夜遅くなってからクタクタになって帰ることが多かった。この仕事は一番厳しかったが、その反面充実感、達成感は十分に味わうことができたと思っている。年齢11~12歳の時である。今日では考えられない生活と思う。

昭和23年7月末、強制的な引揚命令が発生され、残っている島民はほとんどが乳呑路のお寺や学校に収容された。そして8月28日、レニングラード号（貨物船約7千t級）に木材を積んだ後に島民は乗船させられた。乗船は夕方まで続き、出航する時は日も相当西に傾き、なにか寂しい時間帯であったと記憶している。

船は、乳呑路岬から北海道へ進むのかと

思っていたら、樺太の真岡港へ行くとのことで、またもや行先不透明な状況になったと思った。乳呑路沖を離れて間もなく、誰ともなく叫ぶ別れの声が続く。私も姉と一緒に船上に立っていた。その時、隣のご夫婦が「ラバウル小唄」を歌い始めた。「さらば国後よまた来るまでは しばし別れの涙をかくす」しかし、歌声は涙声となり、涙をぼろぼろ流しながら歌っているのが印象的だった。私と姉も、一緒になって泣きながら歌っていたことを思い出している。

このラバウル小唄の替え歌は、船上にいる引揚者全体の合唱に拡大していたような気がする。今でも姉と一緒にカラオケでは、このラバウル小唄を必ず合唱することになっている。故郷を強制的に奪われた島民の悔しさと怒りは、何年経っても忘れることはない。真岡での生活は、食糧の粗末なこと、シラミや南京虫に攻められ大変苦しめられたものである。

昭和23年9月、ようやく引揚船（日本赤十字のマークが入った高倉丸（約3千t級））が真岡港に入る。乗船当日は誰ともなく日本国に帰る期待と喜びで一杯であった。ただ、帰国してからその先はどうか不明のため、不安も同居している様子だった。我が家でも北海道に残るのか、それとも父の故郷である岩手に行くべきか、引揚命令が出てから協議しているが確定していない。高倉丸は予定通り9月初旬に函館港に着く。一端函館収容所にお世話になりながら、最後の居住地を決めるための協議が続けられた結果、北海道の食糧難を理由に父の故郷岩手県に引き揚げることになった。家族一行11名の在所帯である。岩手の親類には大変なご苦労とご迷惑をおかけし申し訳なかったと思っている。

昭和25年6月、父は持病の悪化で世界、その看病疲れもあって母は12月、日赤病院で他界した。残された兄弟姉妹10人は、これからどうして生きるべきかと悩みながらも、親類の方々と地域の皆さんに支えられて生きてき

たのである。

私も引き揚げてから、農家の手伝いに住み込みでお世話になっていたが、24年1月義務教育期間中のため、中学校に編入せよとの村教育委員会の指示に従って、村立戸田中学校1学年3学期から編入となった。3年間のブランクはあったが、なんとかみんなと勉強ができ幸せだった。

特に新日本国憲法を学んだことは大変有意義であり、日本の国づくりの目標を的確にされたものと感動したものである。敗戦の理由が判然としないながらも、平和憲法によって希望の持てる国づくりの一員として参加できることに、喜びを感じたものである。

しかし、北方四島がなぜソ連領になったのか、沖縄がアメリカの占領地として基地を抱えていなければならないのかについて、いつも疑問に思っていたものである。

中学校を卒業して戸田郵便局に就職してから十数年経って、北方四島海域において日本漁船がソ連警備船に拿捕されたニュースを聴くにつけ、北方四島は日本固有の領土であると主張しているのに日本政府は何をしているのか、一体この国の外交交渉はどうなっているのか、北方領土返還要求運動の状況はどうなのか等について兄貴等と話したことがあったが、兄貴達の理解は東西冷戦時代から続いている米ソ関係がある限り、この問題の雪解けは期待できない。残念ながら今の日本外交力ではどうにもならないだろうとのことであつた。その後日ソ漁業協定は、1歩前進の時もあれば2歩後退のこともあり、元島民の漁業関係者にとっては悔しい毎日であつたと思う。北方四島がソ連に占拠された経過についても、十数年前学習したが今回は時間の関係で省略したい。

生まれ故郷、国後島礼文磯に最初に墓参で上陸したのは平成15年8月である。55年振りに故郷の土を踏んだ感動は今も忘れない。しかし故郷は自然保護区となっていて、熊の道が数本あるだけで完全な未開の地と化してい

る。先祖代々、汗して開拓した故郷がどうしてと叫んだものである。ロシアはなんのために北方四島を強硬に占拠し、このような未開の地に逆戻りさせてしまったのかと、当時誘導してくれた外務省の役人に問うたが、わからないとの回答だけだった。

それから2回、平成18年、21年に自由訪問で上陸している。1回目は二男を連れて、3回目は長男を連れて上陸した。3回目にしてようやく生家跡を確認することが出来た。この時の感動は、第1回目の上陸以上のものがあつた。これからの北方領土返還要求運動を考えたとき、1世代の元島民は平均年齢76歳に達しており、運動の停滞が心配されている。2世代、3世代の組織化が急務であることから、1世代の生活の根拠を理解し確認することが最も大切だと主張してきた一人として今回の上陸は大変有意義であると評価している。

同船し、今回確認された元島民の反応も同様であつた。長男も、父が生まれ育まれたところを確認出来て本当に良かったと感激していたことから、今後の訪問は2世、3世を必ず連れて行くことが課題であると思っている。

北方四島返還要求運動は誰のためかと問われることがある。私は、日本の主権に関わる最重要課題であることから、日本国のためであると話している。平成21年7月3日、ようやく国会において北方領土問題解決促進特別措置法が改正され、「北方四島は日本固有の



領土」と明記された。これは日本国が国内はもちろん、全世界に対し公式に北方四島について見解を表明したものである。遅きに失したが、評価したい。

今後の北方四島返還交渉はどうなるのか、現政権の外交交渉に期待する以外にないわけであるが、しかし、ロシア首脳陣を動かすの

は日本国民の返還要求運動の盛り上がりによることが大であるとする。返還要求運動の盛り上がり背景にした、新政権の外交交渉に望みを託してみようではありませんか。

今後とも、みなさんの絶大なるご協力をお願いし、私のつたないお話を終わります。

## 元島民二世の訴え



## 徳島の語り部で思ったこと

木村吉伸さん

「北方領土落語」を初めて披露した。

昨年暮れに、東京で啓発イベントが行われた時「何か出来ないですか？」との依頼があり、「北方領土落語なんてどうですか？題名としてわかりやすいこと、インパクトがあるのでは…」と、軽い気持ちで答えておいた。「なあに、まだ2ヶ月以上あるんだし…」とタカをくくって悠然と構えていた。それにはその時は、場所が「新宿西口イベントスペース」早い話が屋外。お客が集まるかどうかアヤシ。「何とかなるさ…」

ところがある電話を境に状況は一変した。「NHK 釧路放送局の者ですが、北方領土落語というのを取材したいのですが…」「ハイハイ、いつでもどうぞ…」またまた軽々しく返しておいた。よくあることだが、さんざん取材されてオンエア10秒なんてのは当たり前前のマスコミの世界…。と、最後までナメきっていたが、全道で8分位流れる!!「おい！ちょっと待て！」さあ、考えた考えた…どーにかこーにか作ってやったが、金八としては不完全燃焼…「うーむ、どっかちゃんと聞いてくれる所でキチンと演じたい」その思いが叶って今回、徳島で演じることが出来ました。

結果から先に言うと、「バカウケ！」いやあ、

うれしかった。前々から自分の落語家というスキルと元島民二世というものをリンク出来ないか…と置いていただけに、実現出来て感激の一言です。少なくともインパクトはあったのではないかと、という自信は大いにあります。「印象付けた」ということですね。

落語の内容はネタバレになるので詳しくは書きませんが、三遊亭金八的語り部のやり方や留意点をあげてみます。

①お勉強じゃないんだ。

千島樺太交換条約なんたらかんたら…。昭和20年8月15日、終戦後にも係わらず…云々かんぬん…は教科書やウィキペディアを見ればわかること。あっさり言えば知識を言うだけ。そんなことは誰でも出来るし、一番退屈させるモト。

②二世として一世の方のハートの部分を伝えるようにする。

ロシアと中国の関係は…とか領土問題の解決には千年かかる…などなど、確かにこういった意見は、その道では常識かつ当たり前のかもしれませんが、専門家の学者先生様はたくさんいるのだろうし、むしろそちら側のエラーい先生様にお任せしたい。

こういった話を聞くたびに、いつも感じる

のは「人事」「血が通ってない」的に聞こえてしまうのは、金八くんの心に問題があるからだろうか。元島民二世というDNAを持っているのならば、やはり一世やその親世代の思いやハートの部分を伝えたいと思う。むしろそうすべきだと思う。それを出来る人は限られるのであるし、それが自分のアイデンティティーを活かすことにも繋がると思う。

### ③演壇・資料などは使わない

講演等は立派な演壇が用意してあるか。あれを使うと話が伝わらない。前に机があるとダメ、お客様の側にもたいがい机があるが、無い方が望ましい。さえぎる物があると一体感が出にくく、キャッチボールが妨げられる。寄席なんかだと椅子の前に机なんか無いでしょ。机があると笑いの量は確実に半分になる。

同様の理由で、資料など配布もない方が良い。講演会で講師がコピーなど印刷物を配布するが「あんなモン誰も見ていない」「ちょっと小さくて見にくいんですが…」「だったらハナっから持ってくるんじゃねえ!!」資料等があると、どうしても話の密度が薄まる。「何?でも実際、語り部の時に資料を配るだろう…」そんなのカンターン!!一旦、封筒やカバンに全部しまってもらおう。そして話一本

で勝負する。そしてお客を自分の世界に引き込んでおいてから、「ここ!!」という時に資料などを使って説明する。その方が確実に伝わります。

「えー、まず地図をちょっと見てください…北方領土は北海道の東に位置する…」なんてこれ最悪、一番お客の気持ちを離れさせるモト。

ちょっとおしまい攻撃的になってしまったぜ。なにせアタイは落語家。しゃべりが商売なので、ツイそっちになるとアツくなるもんで…許してね、不穏当な表現は。この文章はフィクションです!!

徳島で初めて「北方領土落語」を披露できたこと、そして充分な手応えを感じられたこと。これが大きな成果では…と自画自認。皆様に感謝、金八くんももっと勉強します。



## 北方領土返還要求運動

# 北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟 **山崎 隆**

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の山崎でございます。

本日は、徳島県婦人団体連合会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」が開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動にご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしぶりを語ってもらい、北方領土が、私たち

日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

当北方同盟は、北方領土の返還に関する国民世論の啓発と結集を図るとともに、我が国の正しい主張を広く国際世論に訴え、平和的に北方領土の返還を促進することを目的としており、昭和40年4月に外務大臣許可の公益法人となり、現在に至っております。

ここで、北方四島について、少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて5,036平方キロメートルあり、大変大きな島で、特に択捉島は日本国内で一番大きな島です。

徳島県の面積は約4,147平方キロメートルですから、四島を合わせた面積の方が徳島県よりも大きいということになります。

北方四島は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に不法に占領したことが、北方領土問題の始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領を容認しましたが、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、その年の12月1日、

当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことの出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件などが続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があります。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われております。

北方同盟では、関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

しかしながら、北方領土が不法占拠されて65年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおります。また、高齢化とともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切であり、後継者育成が重要な取り組みとなっております。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様

方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

## 【北海道会場】

- 開催日時 平成22年10月29日(金) 10時00分～11時30分
- 開催場所 北海道胆振地方男女平等参画会館
- 開催団体 北海道女性団体連絡協議会
- 参加者 90名

### 元島民の訴え



## ふるさと

### 高岡 唯一さん

ただいまご紹介いただきました高岡唯一です。北方領土は、北の方から択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島を指しますが、歯舞群島は更に多楽島・志発島・勇留島・秋勇留島・水晶島の五つの小島の総称であります。私の「ふるさと」は多楽島で、1945年当時の事をお話ししたいと思います。

叙情唱歌で「ふるさと」を歌います。「兎追いし彼の山 小鮒釣りし彼の川 夢は今も巡りて 忘れがたき古里 思い出ずる古里」この歌を歌いますと、75才の自分が65年前の10才の少年になれるのです。10才といいますと感性・記憶力が旺盛ですから思い出しながら、また両親・大人の会話を基にしてお話をします。

「ふるさと」の島、多楽島は面積20平方キロメートルのまさに小島ですが、戸数は200数戸人口は1200人位でした。主産業は昆布漁で、我が家も昆布漁家で木造の小さな動力船、小漕ぎの小舟、住宅と納屋、馬が二頭、家族は両親と直ぐ上の兄と姉の二人の六人で生活し、生産活動をしてました。兄弟姉妹は十人でしたが、当時、成人男性は徴兵制度によって軍隊に行っていました。

父は、春から秋まで毎日毎日、来る日も来る日も朝早くから昆布採集に出漁し、昼頃には満載して帰って来ます。その船を馬と人力で浜に引き揚げ、それから馬車に昆布を積み、干場に運び干す作業を家族全員での作業です。自分は見よう見真似で手伝われました。

学校は4キロメートル離れてました。道路というのではなく、砂浜と草原の道を風呂敷に教科書類を包んで背負い、一時間位かけて通ったものです。家の手伝いは風呂（木の大きな桶）とランプの掃除、井戸からの水汲み、薪割りなど親から云われたもの全てでした。遊ぶ時間をもらうと、海辺とか野山・川に行くと、目に入るものが遊びの相手となりました。すなわち兎追いし、小鮒釣りしの歌そのままです。

食料については当時、根室町と各島との不定期運搬船（50トン位）が就航してまして、主食類はほとんど自給自足でした。魚は漁に出ると何時でも獲れますから、生食・煮物・塩漬・干物と食べれますし、野菜類は裏の土地に畑を作り自然肥料を入れ、色々な種を植えますと、一年中食べれるものは獲れましたから隣近所に届けに行かされ、お駄賃を貰っ

たことを思い出します。このように、お互いに助け合う気持ちを皆が心得てた時代でした。秋、野山に行きますとイチゴ・ハマナス・コケモモの実をたくさん取って食べるのが楽しみでした。

子供の手伝い仕事で忘れられない一つに、製品にならない雑昆布、また海辺に打ち寄せられた昆布を拾って干す仕事がありました。その乾燥した昆布を、砂浜でうねにして火を付けて焼くのですが、その火の見張り番をさせられました。強烈な臭いですから、今思い出しても鼻につきます。焼けた灰を袋詰めにして馬車に積んで、精製工場に持ち込む手伝いが一番いやでした。この事は戦後、父親からの話で分かったのですが、灰を精製するとヨードとカリに分類されヨードは薬品、カリは火薬の原料になったんだそうで、吃驚の反面、お国のためになってたんです。

さて、1945年7月15日早朝、毎日の仕事が始まる頃、根室町の方角の空から黒煙がもくもくと上がっているのが、45キロ離れる島から見えたのです。我が家も島の人々も皆びっくりし、根室が空爆を受けたと直感したそうです。数日後、役場から正式に島民に伝えられたそうで、島も爆撃を受けるのではとの不安が募ったそうです。

島民は、従来の生産活動と日常生活を不安の中で一ヶ月過ぎた8月15日、「天皇陛下の玉音放送が正午にある」との情報が伝わり、何事かと島民は直立不動で正午のラジオ放送を聞き、驚き、身体から力がぬけ、地にしゃがみ込んだそうです。まさか日本が戦争に敗けるとは、当時国民は思いもよらないことだったそうです。

その日以降、島民の落胆は次第に大きく、また生活の更なる不安の日々の中、当時歯舞群島は北海道根室支庁歯舞村が行政庁でした。その役場からは何の指示連絡はなく、生産活動の意欲は出ず、日常生活も手につかず、不安と動揺の日を過ぎて9月に入りました。そこに入ってきた情報が外国軍が島に来ると

の事でした。

今まで以上の驚きと、恐怖と不安が島中を覆いました。そのうえ、上陸して来るのはソ連軍だということに、今迄以上の驚愕だったそうです。太平洋戦は、日本軍と米英連合軍との戦争との認識でしたから、何でソ連軍がと思ったそうです。

9月4日、二人のソ連兵が我が家に来たのです。銃を向け、大きな声で床の間の部屋に土足で。私は、母親の背中にまわり母の肩越しに見ていました。銃の先で、仏壇の中、神棚の中を荒らすのですが、父親はただその仕草を見ていました。母親と私も同じでした。姉たちは納屋に隠れていました。

この時の事を思い出しますと、人生で最大の屈辱を受けたのでした。毎日のように、ソ連兵の巡回が続く生活に我慢の限界を感じた父親は、隣の家と相談して根室への脱出を決心し、数日後に荒天の夜中に決行しました。

9月中に、歯舞群島の各島民の殆ほとんどが脱出したようです。脱出の小さな船は荒天の時化のため、沈没遭難した家族が多くいたといわれています。

1947、8年には、ソ連の政策により残留島民の強制退去の措置により樺太(サハリン州)へ貨物船で貨物同様の扱いで送られております。この島民たちは、悲惨な生活を強いられており、数ヶ月後にやっと引き揚げ船で日本本土に帰還しております。

このように、ソ連は元島民を人道的に許すことが出来ない事をしていたのでした。私が北方領土問題に関心を持ち、返還運動に係わるようになったのは20才になった1956年の日ソ共同宣言が調印された年からで、ソ連が太平洋戦争に参戦した件を、当時のこの戦争に係わる各国との間でかわされた条約・協定・宣言等を文献で勉強し、また先輩各氏の話聞く事で、いかにソ連が不法行為で北方領土四島を占拠したかを知ってるからです!!

さて、当時の悲惨な状況をお話ししましたが、私たち元島民の古里であり我が国固有の

北方四島についてご理解頂けたでしょうか。国際情勢が目まぐるしく激動する中、ロシアが北方四島を日本に返さなければ真の隣人友好は醸成されない事の日本外交を推進する念ずる次第です。また時間の感覚として、日本人はせっかちな国民性なのに対し、ロシア人はのんびりゆったりした民族であり、両国間の領土問題解決には、まだまだ時間が必要との認識が寛容である事、そして領土問題は諦めたら未来永久絶対返ってこないと云うことを日本人は深く肝に銘じなければならない。従って、子に孫々迄日本国民が一体となって国論を高め、四島一括返還一致団結体制であることをロシアに示して行く事が重要と訴える次第です。

人は誰も生まれ育った故郷があり、何時でも何処にいても訪れられると云う心の文化・生活習慣を有しておりますが、私たち元島民は我が固有の領土と主張をしても自由に訪れることの出来ない現実を強く訴えるのであり

#### 元島民二世の訴え



### 室蘭で感じたこと思ったこと

木村吉伸さん

言ったことはたった一つ。「アイディンティティーがあるんだ」ってこと。

帰属とか、自己同一性とか…なんかそんなような意味ね。まあ「ルーツ」と言い換えてもわかりやすいかも。

落語家は、二ツ目になると「紋付」を染めるのだが、その時父（志発島相泊崎出身）に聞いた。「家の紋はなんなんだ」「わからない」「親は着物とか着ていなかったのか?」「引き揚げてくる時、みんな置いて来たからわからないんだ…」とのこと。

つまり、自分の家というものが、どこから

ます。

1935年生まれの75才代の自分が体験を踏まえ語り部をしなければ、痛々しく悲しい惨事が風化してしまうと思うのです。人道的立場からも頑張ってく覚悟しております。

本日ご参集の皆様、どうぞ北方領土返還の国民的運動にご協力を心からお願い申し上げます。

終わりになりましたが、胆振管内婦人団体のご活躍と会場の皆様のご健勝を祈念申し上げます。



いたにもかかわらず、その場所へは自由に訪問することもままならない…なんかおかしいじゃない…何か気持ち悪いじゃない…そういう現実がある。そういう思いを持った人間がいるんだ…ということを皆様ご理解ください。何てことを話しました。

話の後、金八くんの相方「ターちゃん」を使って、「腹話術で北方領土を訴える」、道新の見出しみたいです、これがイヤハヤ大変な大爆笑、みんな大喜び、出演料をもらいたかったくらいのもんだ!!終わったら役員の方が楽屋に来て、「いやあ…とっても良かった。これだったら市民会館でやればよかった」…と最上級なおホメの言葉。芸人・三遊亭金八としてはめでたしめでたしなのだが…

ここで前々から思っていた疑問を…。「もっともだなあ…とか正しいなあって話はずまらないのよ。お客を笑わせる、ウケさせるにはウソじゃないといけないのよ。」これを当てはめると…。

北方領土返還って話は大事なのよ。日本として正しいのよ。ただ「おもしろくない」とよく言われるんだけど「北方領土のこととかちょっとネタにしてさあ…」なんて。

今回も確かに「腹話術で北方領土」ってのはヘッドライン的に「おやっ？」て感じだし、実際ウケたんだ。ただそれはあくまでも「ネタ」、いってみりゃ「ウソ話」。本質と違うんじゃないか、これでいいのだろうか、と金八くんの良心がきしむのよ…。

今、テレビなんかはみんなそうでしょ。政治とか選挙とかをバラエティー的に面白おかしくしてしまう…それで良いのかしら？考え方が退化しちゃうんじゃないか…。

しかし、楽屋に来た役員さんが満足気だった。「面白かった!!」ということはインパクトのあることなのです。まず北方領土の問題を知ってもらわないことには、どうにも仕方がない訳で、その軸足からいくと充分すぎる

働きではあるのだが…ねえ…そこらへんが超マジメ純粋な落語家・三遊亭金八っこの密かなるジレンマなのです。

お願い誰が教えて、これでいいのか悪いのか。…と、こう叫びたい気分です。

そりゃあね、ただ出てってウダウダとしゃべるのは誰でも出来んの。(失礼)やっぱり「北方領土元島民二世の落語家です」っていうからには、キチンとやらないとマズイでしょ。伝わらないでしょ!

なので着物に着替えて、わざわざ腹話術の人形まで持って行ってやるわけ。仕事だってこんなに一生懸命やらないよ。

そこまでしてやるのは、やはりこの問題の早期解決を望んでいるに外なくないのです。芸人は仕事の特性上「自分のことだけ考えていけばいい稼業」です。しかしただ目の前にやることのあるならば、やらないといけないでしょう。

それがアタイにとっての「北方領土」ということになりましょうか…。それと一人では何も出来ません。仲間が必要です。仲間が集まってくるには、その人に人間的な魅力が必要です。「芸は人なり」という言葉があります。自分も勉強しながら今回の語り部に参加させていただき、心に一石を投じてくれる出来事にめぐり会えた。そのことに感謝の気持ちです。室蘭のご婦人の皆様、本当にありがとうございました。



## 北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟 末澤 秀 樹

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の末澤でございます。

本日は、北海道女性団体連絡協議会、胆振婦人団体連絡協議会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」が開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動にご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしぶりを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

当北方同盟は、北方領土の返還に関する国民世論の啓発と結集を図るとともに、我が国の正しい主張を広く国際世論に訴え、平和的に北方領土の返還を促進することを目的としており、昭和40年4月に外務大臣許可の公益法人となり、現在に至っております。

北海道にお住まいになっている皆様には、もうご存じかと思いますが、ここで、北方四島について少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。

ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて

5,036平方キロメートルあり、大変大きな島です。

北方四島は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に不法に占領したことが、北方領土問題の始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領を容認しましたが、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、その年の12月1日、当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことの出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件などが続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があります。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われております。

北方同盟では、関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

しかしながら、北方領土が不法占拠されて65年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおります。また、高齢化とともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく

理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切であり、後継者育成が重要な取り組みとなっています。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところ です。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

---

平成22年度  
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて  
第21回「元島民の北方領土を語る会」集録

---

発行／平成22年12月

編集／観 北方領土復帰期成同盟

〒060-0031

札幌市中央区北1条東1丁目

明治安田生命札幌北1条東ビル

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

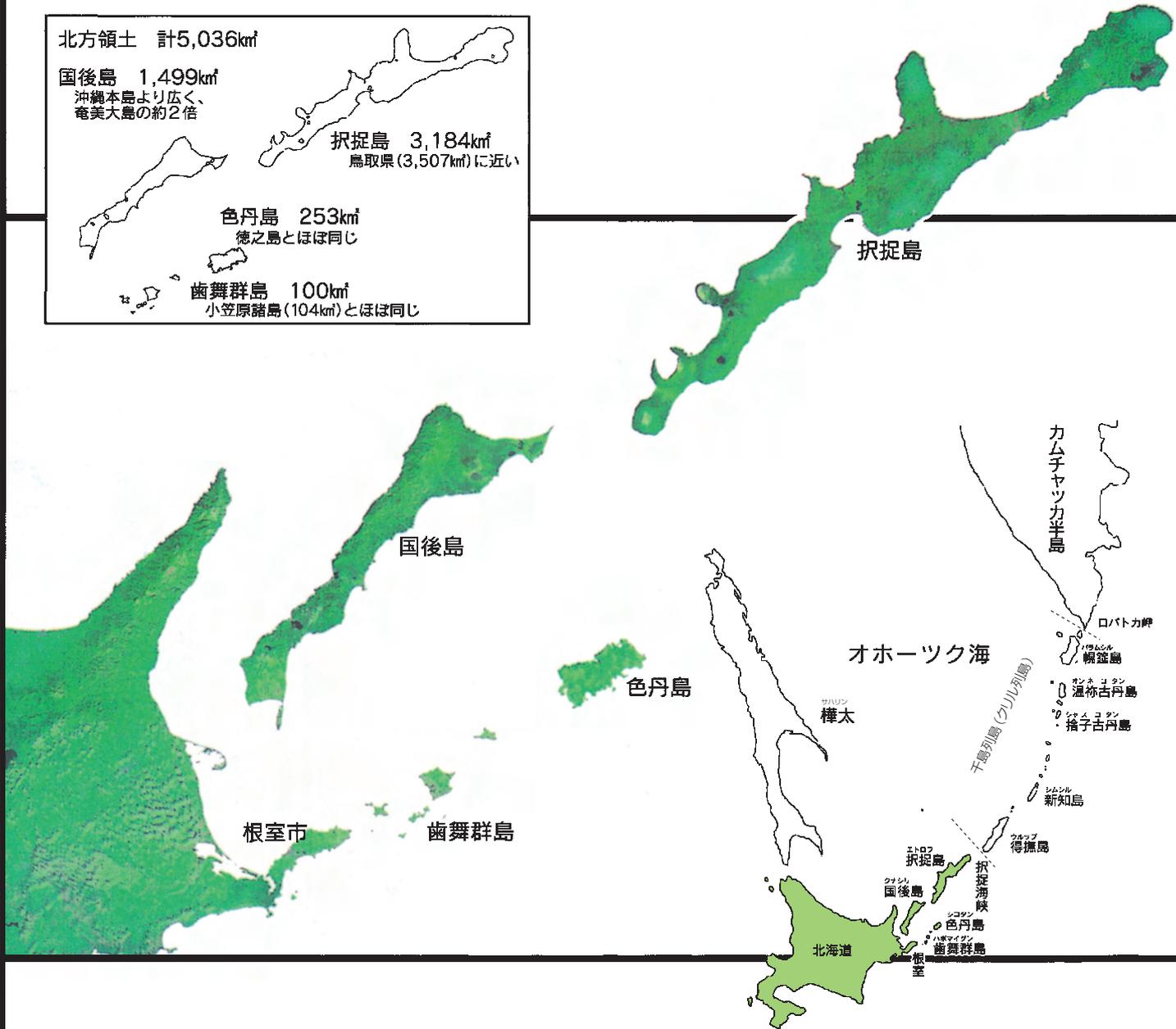
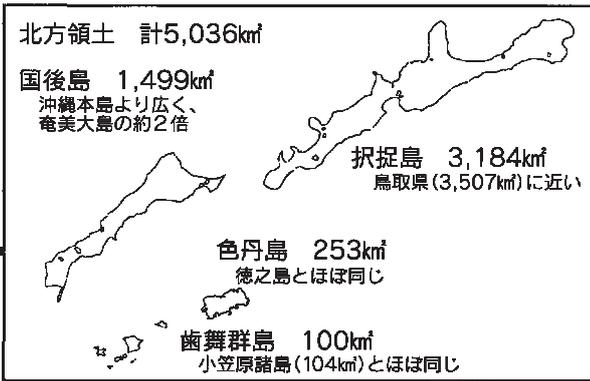
e-mail：[hoppou-d@isis.ocn.ne.jp](mailto:hoppou-d@isis.ocn.ne.jp)

写真提供 児玉泰子さん

印刷／正文舎印刷株式会社

---

私たちが「北方領土」と呼ぶのは、  
 択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多楽島、志発島、  
 勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



国民の 声と熱意で 四島(しま)返還  
 (平成22年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)